島津家の戦争

米窪明美

集英社インターナショナル　ウェブ立ち読み

まえがき

宮崎県都城市は、鹿児島市と宮崎市の中間に位置する南九州の中核都市である。

周囲をぐるりと山に囲まれた地形から都城盆地と称されてはいるが、京都のように山が迫ってくるような圧迫感はなく、むしろ平原といったほうがふさわしいほど、広々とした印象を受ける。

雄大な自然を誇るこの地を幕末まで治めていたのが、本書の主人公・都城島津家である。

同家は島津宗家の分家筋にあたる家柄で、藩内最大の私領・都城四万石を背景に、大きな勢力を有していた。東京で生まれ育った私が、この家の歴史に興味を持ったのは『都城島津家日誌』との出会いがきっかけだった。

私がこの本の存在を知ったのは、今から十年以上前のことになる。

その頃私は母校・学習院の総務部秘書課でアルバイトをしていた。仕事内容は五人の理事のもとを訪れる来客へのお茶出しが中心で、たまに当時院長であった島津久厚先生の原稿を、パソコンにパチパチと打ち込んでいればよいというものだった。

そんな仕事の中で私が一番気に入っていたのは、島津先生の原稿用の資料を大学図書館で探すこと。先生のもとには幼稚園から大学院までの学校組織、各クラブの同窓会など、学内のありとあらゆる団体から原稿の依頼があった。相手が誰でも、どんなに短い文章でも、島津先生は必ず資料を取り寄せるのが常だった。私はここぞとばかりにわざとゆっくり図書館の中を歩き回り、原稿にはあまり関係のない本を手に取っては見入っていた。

『都城島津家日誌』と巡り合ったのも、このような折だった。

大学図書館の奥にある書庫三階の、幾列も並ぶ書棚の林の一番下の段の隅に、ひっそりとその本はあった。まず題字に目がいった。背表紙の幅いっぱいに広がるたっぷりと墨を含んだ、不揃いでやや右上がりの特徴ある手蹟。毎日のように見慣れた島津先生のそれである。

ごく薄いベージュ色に白菊、黄菊の模様が浮き出している美しい装丁の本は、淡々とした事務日記。しかも明治四（一八七一）年から七十七年間分、八冊もある大部なものだ。

職場に戻った私は、早速島津先生に日誌のことを尋ねた。すると先生はいたずらを見つかった子どものように首をすくめ、「あれは田舎侍の事務所の日記です。何かの研究材料にでもなればよい、と考えて出版しました」と照れ笑いをされた。

面白い本だと思った私は、先生ご本人が登場する昭和編二冊を図書館から借りた。久厚少年が青年へと変わってゆくくだりはまるで映画を見るようにリアルだったが、私は段々息苦しくなり読み進むことができなくなってしまう。なにせ登場人物の久厚少年とは毎日会っている間柄、親の若い頃の日記を盗み見ているような感覚にとらわれたのだ。

それから十年ほどが経過し、再びこの本を手に取った。島津先生も院長職を退かれ、私も職場を離れていたので、以前よりも冷静にこの本を読むことができるはず。

ところが……読めなかった。

明治編は日本漢文で書かれているので、その方面の知識のない私にはむずかしい。全八巻の最初の一巻を読み切るのに数ヶ月を要した。それでも、一度日記の世界に入り込めれば面白くなる。現在に近づくにしたがって記述が現代文に変化してゆくこともあり、残りの七巻は二週間ほどで読むことができた。

一読して、「これを基礎資料として本を書いたらさぞ面白いだろうな」と考えたが、しかし同時に、それはとても無理な相談だとも思った。

あまりにも内容が赤裸々すぎる。

自分に都合の悪いことにはあえて触れない個人の日記と異なり、事務所の日誌は当主家にとって良いことも悪いことも区別なく、淡々とした筆致で記してゆく。だからこそ、当主家の内実が手に取るように分かるのだが、プライバシーを大切にする今日では、各方面に差しさわりが出るとも限らない。

だめもとで連絡を取った先生の反応は、私の予想に反して出版に前向きなものだった。こうして私は本書を作成する運びとなったのだが、いざ執筆のため本格的な調査を開始すると、明治以降の都城島津家の様子だけを描いても彼らの本質は伝わらない、と思うようになった。

後に本書で詳しく述べることになるが、薩摩は鎌倉時代より七百年もの間一つの家の支配が続

き、人々の暮らしぶりに中世の色合いが濃く残る地域である。そのことを念頭に置かないと、近代以降の彼らの行動の意図がさっぱり理解できない。

そこで方針を転換し、時計の針を戦国時代まで巻き戻して、長い時間の中で都城島津家やその家臣団の生きざまを眺めてゆくことにした。

本書の執筆にあたり、島津久厚、穣子様ご夫妻にはたびたびお目にかかり一族の歴史をご教示頂く機会を得た。これにより史料だけでは分からない、都城島津家とその家臣団の方々の体温のようなものを、加えることができたのではないかと考えている。また、幕末から近代までの都城の歴史については、都城市教育委員会文化財課の武田浩明氏からお教えを受けた。

そして、本書の出版に関しては集英社インターナショナルの佐藤眞氏のお手を煩わせた。佐藤氏の懇切丁寧な指導がなければ、本書は世に出ることはなかっただろう。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

さて、前置きはこれくらいにして、そろそろ都城島津家の歴史を繙いてゆこう。同家の蔵に眠っていた一通の古ぼけた書状にまつわる話から物語は始まる。

平成二十二年七月

米窪明美

まえがき……2
第一章　謎の国書……10
第二章　武士の王国……25
第三章　京の守護者……40
第四章　薩英戦争……59
第五章　日本最強の部隊……73
第六章　島津、分断す……99

第七章　西南に独立国家あり……123
第八章　戦火、已(や)む……145
第九章　殿様と新政府……178
第十章　ふたたび海を渡る……200
終章　帰還……229
あとがきにかえて……244
主要参考文献……249

第一章　謎の国書

都城は南国宮崎にありながら「霧のまち」として知られている。内陸性の気候ゆえに一日の寒暖の差が大きく、年間を通して朝霧が発生しやすい。

乳白色のベールが街を包むと、ほんの数メートル先も見えず、通勤を急ぐ車はヘッドライトを点けてゆっくり走らなければならない。しかし午前九時頃になると、霧海は日差しに溶かされ一瞬にして消える。たちまち視界が晴れ渡り、魔法が解けた街は幻想的な光景から一転して日常のそれに変わってしまう。

平成十六（二〇〇四）年十月、幕末までこの地を治めていた旧領主・都城島津家から同市へ、約一万点もの史料群が寄贈された。

古文書、古記録、絵図や武具など多岐にわたる史料群の解析が進むにつれ、その中に国宝級の書状が含まれていることが分かった。

「琉球国王宛朝鮮国王国書」

日付は明暦の弘治十三年正月、西暦でいえば一五〇〇年、日本では室町幕府十一代将軍・足利義澄の時代にあたる。応仁の乱により幕府の弱体化が明らかとなり、日本各地で戦国大名がうごめきだしていた。関ヶ原の戦いで天下統一がなされるのは、これからちょうど百年後の話である。

差出人は朝鮮国王・李㦸（燕山君）、受取人は琉球国王（尚真王）。正式な外交文書である国書は縦五十八・二センチ、横百十八・四センチとかなり大きい。

楮打紙の国書には、次のようなメッセージが書かれていた。

「丁巳の歳（西暦一四九七年）、琉球船が朝鮮の南鄙に漂着しました。これを送還しようとしましたが、乗組員十人のうち、すでに六人が病死し、生存者は四名です。折よく対馬人が琉球に向かうというので、これに同乗させて送還いたします。また渡航費用として、彼らに食糧を支給しましたのでご確認ください。彼らが旧業に復することができれば幸いに存じます」（『都城地域史研究』第十二号、「都城島津家史料の朝鮮国王国書と野辺・向井氏」）

PHOTO

本物であれば日本国内に現存する最古の朝鮮国王国書である。

しかも国内にある朝鮮国王国書のほとんどは、

江戸時代に日本に派遣された「朝鮮通信使」が持参したもので、受取人は徳川家の将軍たちだ。都城島津家所蔵の書状のように、宛名が外国（琉球）の君主であるものは他に例がない。

そのうえ国書に登場する二人の国王が、ともに歴史上有名な人物であることも興味をそそる。

差出人の朝鮮王国第十代国王・燕山君（一四七六～一五〇六）は、稀に見る暴君としてその名を遺していた。

燕山君は第九代国王・成宗と、病的な嫉妬深さにより廃された妃・尹氏との間に、長男として生まれ、若くして王位に即く。治世の初めは安定していたが、次第に独裁体制を強め、科挙官僚たちとの対立が深まった。大規模な粛清に不満を募らせた家臣たちは、異母弟で後の中宗を擁してクーデターを起こし、燕山君を失脚へ追い込む。そして彼は廃帝とされた。

歴代朝鮮国王は逝去の後、中国風に宗廟の称号で「太宗」や「世宗」などと呼ばれるが、廃帝となった彼は宗廟に祀られなかったために「燕山君」と呼ばれているのだという。物語以上に物語的な生涯である。

次いで受取人の尚真王（一四六五～一五二六）だが、こちらは反対に名君としてその名を遺している。

第二尚氏王朝の三代目の王であった尚真王は、地方権力者を首里に移住させて、その膝下に抑え込み、地方へは首里政府から役人を差し向けることで中央集権化を進めた。

また、官職や位階を刷新するなど政治機構の整備も行なった。彼の断行した行政改革により、

琉球王朝の体制は盤石なものとなったといえる。首里城正殿高欄に彼自身が刻ませた業績によれば、国民を大切にし、仏教の普及に努め、外交にも貢献したとある。王国の先頭に立ち続けた治世はなんと五十年にも及ぶ。あらゆる意味で尚真王は「大王」であった。

国書は波乱に満ちた人生を過ごした、二人の王の間で交わされるはずのものであったのだ。その国書が、いったいなぜ日本の、しかも内陸の盆地に存在するのだろうか。

都城に思わぬ歴史的遺物があったというニュースは、驚きをもって受け止められた。ことに研究者の関心が高く、市へは問い合わせが殺到した。たちまち彼らの間で論争が起き、なかには国書を偽物と唱える説もあった。

論議に終止符を打ったのは、日韓歴史共同研究委員会第二分科会の調査結果である。

同委員会は平成十三（二〇〇一）年十月の日韓首脳会議（小泉純一郎総理、金大中大統領）の合意に基づき、両国の相互理解のために発足した。両国外務省主幹のもと、双方の学者や研究者が日韓関係史について共同で調査・研究を行なった。

第二分科会（中・近世）日本側委員は、国内に現存する二十五点の朝鮮国王国書に関する科学的分析作業を行ない、料紙の重量、質、形状、印の形態などから見て、都城島津家所蔵の書状を本物と確認したのだ。

めでたく国書は本物と分かった。

しかし、なぜ都城にあったのか——秘密を解く鍵は旧領主・都城島津家とともに歩んできた地域の歴史の中に隠されていた。

都城島津家は、文和元（一三五二）年島津宗家（本家）の四代当主・島津忠宗の六男・資忠が軍功により足利将軍家から日向国荘内北郷三百町を与えられたことに始まる。江戸初期に島津宗家の命で島津姓に復するまで、資忠以来、家号として「北郷」姓を名乗っていたが、本書では煩瑣を避けるために一貫して都城島津家と表記する。

資忠の入部以来、都城島津家は、一時的に別の場所へ移った時期があるものの、幕末まで五百年余りにわたりこの地域を支配することになるのだが、資忠の時代から二世紀余りを経た天正元（一五七三）年、この都城島津家に転機が訪れる。

第十代当主・時久が大隅地域に勢力を持っていた肝付氏を破り、その軍功により宗家より恒吉（現在の鹿児島県大隅町）、永吉（現在の鹿児島県大崎町）、内之浦（鹿児島県肝付町）を与えられたのである。

要するに、都城島津家は外海へと繋がる港を手に入れたということだ。そして、その内之浦は福建や広東など、中国東南沿海域からの唐船の渡来地であった。

現在ではＪＡＸＡ（独立行政法人 宇宙航空研究開発機構）のロケット発射基地があることで知られる内之浦は、この頃、中国東南海域、琉球、ルソン島を結ぶ東アジア貿易圏の拠点の一つであった。今では宇宙への港になっている内之浦は、当時はシナや南蛮国へと繋がる貿易港だったのだ。

内之浦湾から志布志湾南部にかけての地域を影響下に置いた都城島津家は、これ以降、海外貿

易に積極的に乗り出してゆくことになる。

平らな船底と、木や竹で編んだ四角い大きな帆が特徴的な中国のジャンク船が姿を現わすと、ハチミツにたかる蟻のように、内之浦の浜へ向かい人々が飛び出してくる。数ヶ国語を操る抜け目のない海商たちとの値段交渉が終わると、砂糖、陶磁器、鮮やかな色彩の絹織物など珍しい品々が船底から引き出された。

内之浦を手中に収めたことで、都城島津家が得たものは大きかったはずだ。この時期、九州の海上交通に深くかかわっていた人々の中には、破竹の勢いで領土を拡大した都城島津家の配下となる者たちが後を絶たなかった。

ここに都城島津家が朝鮮国王国書を手に入れた秘密が隠されていた。

都城島津家所蔵文書目録によれば、国書は寛延(かんえん)三（一七五〇）年、家臣・向井新左衛門より献上されている。向井氏は本家筋の野辺氏とともに海上交通で活躍した一族で、十六世紀後半つまり都城島津家が内之浦を治めていた時に家臣団に加わっていた。残された史料から細かな事実を手繰り寄せ調べてゆくと、国書はもともと中世期後半に櫛間(くしま)（現在の宮崎県串間市）の領主であった野辺氏が手に入れたもので、分家筋の向井氏に渡り同家で所蔵されたのち、最終的に都城島津家の蔵に入ったことが分かった。

では、野辺氏はどのようにして国書を手に入れたのだろうか。

恐らく国書は朝鮮王国から送還される琉球人が乗り合わせた対馬人の船から、海賊とおぼしき

何者かによって略奪されたものであろう。

先ほども記したように、国書の内容は遭難事故処理に関する事務的なものである。最初から国書目当てに船が襲われたとは考えにくい。略奪者の目的は対馬人の船の積荷に違いない。たまたまその船に、国書があったというだけのことだろう。

当時の東シナ海には倭寇と呼ばれる海賊たちがいた。「倭寇」とは「日本の海賊」という意味だが、その実態はいわば寄り合い所帯、多国籍にまたがる犯罪組織のようなものであった。そうはいっても、倭寇の中には日本列島の島々に拠点を持っていた者もいたので、まったくの「偽日本人」というわけではない。彼らの中には日本人の武士の強さにあやかるためなのか、丁髷を結っていた者もいたという。

だが、倭寇によって奪われたとしても、そこから先が分からない。略奪された国書がどのような経緯で野辺氏に渡ったのかという点については、いまだ不明のままである。

しかし、当時の東アジア地域の情勢を知れば、この国書がなぜ出され、そしてなぜ都城にまで届いたかは、それほど不思議なことではない。

当時、中国大陸を支配していた明朝は海禁政策を布いていた。

明の皇帝は国内の反明勢力と海賊との結びつきを恐れて、自国の民間海上貿易を禁止し、外国の朝貢船のみに入港を許した。いわば条件付きの鎖国である。

しかも朝貢船は好きな時に好きな場所へ行けるわけではなく、国ごとに時期や入港場所の指定

があった。たとえば日本は十年に一度、浙江省寧波から入港するようにと定められていた。このように厳しい国同士の取り決めが交わされる一方で、盛んになっていったのが密貿易である。

十六世紀初頭、東アジアの貿易市場をさらに活気づける事件が起こる。ポルトガルのアジア進出である。一五一〇年、ポルトガルはインドのゴアを占領。その後セイロン島、マラッカ、モルッカ諸島が次々とポルトガルの手に落ちていった。

ポルトガルの得た果実の中で、ことに重要なのはマラッカだった。マラッカは南シナ海とインド洋を結ぶ海上交通の要所だ。ポルトガルがこの港を押さえたことで、ヨーロッパから東アジアまでの広大な範囲が一つに繋がった。

ポルトガルはマラッカを拠点に東アジア貿易にも乗り出した。ちなみに東アジアの輸出品のなかで、特にヨーロッパからの需要が高かったのは日本の銀だ。日本の銀は石見銀山の発見と灰吹き法と呼ばれる精錬法の導入により飛躍的に産出量が増大し、日本は新大陸アメリカに次ぐ世界第二位の銀産出国となっていた。

一連の動きのなかで、海上交通の花形に躍り出たのが琉球だった。

琉球はもともと東シナ海と南シナ海を結ぶ役目を果たしてきた。ポルトガルがマラッカを占領したことにより、自国はもちろん、中国、朝鮮、日本など東アジア諸国の商品をマラッカに持ち込み、反対にインドやジャワ諸島、ヨーロッパの商品を持ち帰ることが可能になった。琉球に世界中の品物が集まるようになったのだ。

この恩恵にあずかったのが薩摩であり、その入口の一つが都城島津家所有の内之浦であった。

従来、日本は明国との窓口を博多に設けており、貿易において薩摩は博多に一歩も二歩も先を越されていた。しかし薩摩は琉球を介することで、明どころか世界中の商品を手に入れることができるようになったのだ。

慶長十四（一六〇九）年、家康の許可を得て薩摩軍は奄美地域から琉球へ侵攻した。

独自の高度な文明を誇っていた琉球王国であったが、最新鋭の兵器を携えた薩摩武士の猛攻撃の前にはひとたまりもなく、たちまち首里城は陥落、琉球国王・尚寧王は捕らえられ、鹿児島へと連行された。

翌年、尚寧王は薩摩藩主・島津家久とともに駿府城で大御所・徳川家康と、江戸城で二代将軍・徳川秀忠と面会し、その後再び鹿児島に戻ると島津家の求めに応じて起請文を記し、やっとの思いで琉球へと帰国した。ここから琉球の苦難の歴史が始まる。

幕府から琉球の仕置きを命じられた薩摩藩は、与論島以北の奄美地方を割譲して薩摩藩領としたものの、琉球全土を植民地化せず、沖縄・先島は琉球王国として残した。

薩摩藩は琉球をあえて同化せず、従来の王朝体制を温存して、中国との朝貢関係も継続させた。言うまでもないが、このような形式をとったのは薩摩側にとって都合がよいからであり、琉球の独自性を認めていたからではない。

薩摩藩は琉球に出先機関（琉球仮屋）を設置し、朝貢貿易の運営に関与するとともに、琉球から多額の租税を徴収した。薩摩藩がいろいろな名目をこじつけて琉球から甘い汁を吸い上げる様

子は、まさに「骨の髄まで」という表現がぴったりとあてはまる。

また、琉球は薩摩藩を介して幕府へも服従を強いられた。

琉球王が即位するたびに謝恩使を、将軍の代替わりのたびに慶賀使をそれぞれ将軍家へ遣わすことになっていた。その際、使節は中国風の衣装を身につけ、異国情緒たっぷりな行列を仕立てたという。

使節派遣は幕府からすれば異国を従えていることを天下に示す機会であり、薩摩藩にとってはその異国を事実上従えている自らの存在感を幕府に示す機会でもあった。

むろん、こうした支配の在り方は琉球の人々にとっては屈辱的なものだった。しかしながら、この時代の琉球支配と、近代になってからの琉球統治とを比べて、どちらのほうがより文明的であったかといえば、その答えは簡単に出ない。なぜならば江戸幕府も、薩摩藩もいわゆる「同化政策」だけは行なわなかったからである。つまり、支配はしても、琉球の文化や風俗までを変えようとはしていない。

このように薩摩藩が琉球固有の文化を残したのは、あくまでも政治上の思惑（おもわく）であり、琉球の文化に高い敬意を払ったからではなかった。琉球からみれば薩摩藩は憎むべき侵略者そのものだ。

その点を踏まえたうえでなお、薩摩藩には多様な文化が並立して存在することを良しとする、度量の広さがあった——そう言っても差し支えないのではないか。

薩摩藩の政策に従うことで、結果として琉球は独立国家としての尊厳を保つことができ、最低

限の自尊心は守られた。将軍家への使節派遣の件にしても、幕府や薩摩藩の下心とは別に、琉球王国の独立性を日本国に示すという意味で、彼らにとってもメリットはあるにはあった。

琉球が琉球であること、そのうえに薩摩藩の利益があるという統治の手法は、イギリスの植民地政策とよく似ている。最低限だが相手の尊厳を容認するかのような体裁を整える。統治上の狡猾さを両者は持ち合わせていた。

薩摩藩の外交政策と、約三百年後に大日本帝国がアジアの植民地で採用した「同化政策」とを比べてみていただきたい。双方ともに「侵略」は「侵略」だが、その後に残した禍根の大きさはどちらがどうなのか、現在の私たち自身が身に染みて知っていることである。

薩摩藩のほうが文明的だなどと言うつもりは毛頭ない。むしろ相手国に本気でよかれと思い同化政策をとった分、大日本帝国の政治家のほうがより純粋と言えなくもない。

だが、そのような「生ぬるい善意」こそが、相手の自尊心を最も深く傷付けてしまう。

国際政治において優しさや思いやりは、時に相手の誇りを踏みにじり、かえって憎しみの温床となる。薩摩藩もイギリスも外交上の幾多の苦い経験から、そのことを知り抜いていたのだろう。

ちなみに時代はずっと下るが、幕末期、島津宗家第二十八代当主であった斉彬は、いわゆる「集成館事業」を興した。近代的工場群である「集成館」を設立して、西洋式の造船や紡績などに力を入れたことは有名だ。

だが、薩摩の歴史を振り返れば、斉彬のような「名君」はけっして突然変異的に現われたものではない。鎖国体制を不磨の大典のごとく心得ていた江戸幕府や諸藩の藩主と異なり、薩摩の

人々にとって海外は決して遠い存在ではなかったのである。

ところで薩摩の人々が国際性を磨く機会は何も貿易だけに限られたわけではない。もっと密接な形での交流もあった。時代が下り、明の内政が揺らいでゆくと、その余波はさまざまな形で海伝いに薩摩まで及んだからである。

天正年間（一五七三～一五九一）、内之浦には思いがけない客人たちが相次いで訪れた。

万暦帝の圧政に耐えかねた、明からの避難民たちである。

この皇帝の名は、景徳鎮の官窯で焼かれた磁器・万暦赤絵で日本人にも馴染みが深い。明朝は一世一元制を採用していたので（近代日本は、これを真似た）、皇帝は諡号ではなく、元号で呼ばれている。

ゆえに万暦帝の在位時代の年号は万暦であるのだが、美しい色彩と華麗な絵付けで評価の高い万暦赤絵とは裏腹に、この時代の明朝は滅亡への扉を開けることになる。

幼くして即位した万暦帝は、宰相・張居正の手腕に支えられている間は、安定した国内運営を行なっていたのだが、名宰相が死に、親政を執りだすと次第に国は乱れてゆく。後に清朝を興す満洲の女真族の侵入、相次ぐ内乱、豊臣秀吉の朝鮮出兵に対する援軍派遣などの軍事費を賄うために、厳しく税金を取り立て民衆は疲弊していった。

内之浦へたどり着いたのは、このような明での生活に疲れ果て新天地を求めてきた難民たちであったのだ。

都城島津家当主・時久は彼らを都城へ迎え入れ手厚く保護した。

鳥が餌を求めて国境なく大空を行き交うように、人間もまた生きやすい場所を求めて大海原を移動する。海商や倭寇とおぼしき輩とも分け隔てなく付き合い、異国の酒をガラスの盃に注ぎ、ヨーロッパ人の手になる世界地図を眺める都城島津家の人々にとって、それはごく当たり前のことと受け取られた。

彼らは都城の町なかに「とじんまち」と呼ばれる居留地を形成した。「とじんまち」とは唐人町の転訛である。

渡来人を受け入れた町は福岡の唐人町をはじめ他にもいくつもあるが、どれも海に沿った地域にあって、都城のように山の中に存在する例はきわめて珍しい。国際貿易港・内之浦を手に入れても、都城島津家の本拠地はあくまでも都城盆地にある。都城島津家当主・時久は都城そのものの国際化を目論んでいた。

風が吹けば一斉に稲穂が揺れるのどかな田園に、渡来人たちの故郷の言葉・閩語の歌が流れ出す。山々に囲まれた国際都市・都城を行き交う見なれない服装、異なる風習、まるでおとぎ話を地でゆくようなものだ。

当初はさすがの都城の人々も目を白黒させたに違いない。しかし地域そのものが新しい文化を受け入れる柔軟性を持っているので、渡来人たちも次第に溶け込んでいったようだ。

国際化により都城の人々は渡来人たちから最新の医療やさまざまな技術を学んだ。都城の学術、文化の水準は世界的なレベルに達していた。もともと山のなかで暮らしていた都城の人々には、

造船などの海に関する知識が乏しい。渡来人を受け入れることで、緑の都城盆地は本当の意味で海と結ばれた。

東アジア諸国は海に隔てられているために、たとえばヨーロッパ諸国のような連帯感、一体性がないとよくいわれる。しかしそれは事実ではない。歴史を検討すれば、東アジアは海を介して繋がった一つの地域で、各国の政治状況が連動していることが分かる。

たとえば十七世紀、日本が鎖国へと踏み出した時期と、中国が明朝から清朝へ交替する時期は重なっている。東シナ海を取り囲む各国が新秩序を樹立し、それぞれの国の政権の求心力が強まると、それと反比例するように海の温度は下がり、多くの港は沈黙していった。その一つの帰結が、日本の鎖国である。

大海原を我が物顔で往き来した男たちは影を潜め、中世東シナ海の夏は終わった。

本書の主人公である都城と海外との自由な往来も、鎖国体制の確立にともなって失われてしまうことになる。さらに加えて、寛永八（一六三一）年、都城の「外港」にあたる内之浦が薩摩藩直轄となったことで、彼らは緑の盆地に戻らざるをえなかった。

しかしながら、彼らと海との関係が完全に切れてしまったわけではない。

寛永十八（一六四一）年、徳川幕府の一連の鎖国政策が完成したのちにも、薩摩藩は事実上、琉球をその影響下においていた。直接、中国や東南アジアとの交流はできなくとも、琉球を介することで、海外への窓を閉じることはなかった。

島津一族は鹿児島城下と所領との二ヶ所に屋敷を構え、半年ごとに双方を往き来する決まりになっており、都城島津家の一族やそれに付き従う上級家臣団は、一年の半分を鹿児島の海辺を眺めて暮らした。彼らの屋敷には琉球からもたらされた海外の品々がさりげなく置かれ、そうした文物の中にひそやかに眠っていたのが、例の朝鮮国王からの国書であった、というわけなのである。

第二章　武士の王国

山々に囲まれたごく平凡な地方都市である都城になぜ、朝鮮国王からの国書という国宝級のものが眠っていたのか――その理由を探っていくなかで、前章では都城が海を越えて東アジア全域と繋がっていたことを見てきたわけだが、実はこの地域の異色さはそれに留まらない。

すでに述べたように、江戸幕府の作り上げた鎖国体制の中にありながら、薩摩藩は琉球を通じて外国との貿易を行ない続けてきた。薩摩藩の人々にとっては江戸幕府のご禁制などはどこ吹く風とばかりに振る舞っていた。

薩摩の人々は、表向きこそ幕府の定めた掟に従ったふりはしていても、実は戦国と変わらぬ中世的な気風を残していた。そして、それは土地とそこに住む人間との関係においてもまたしかり。

江戸幕藩体制の中で、いかに薩摩藩が特異な藩であったか――そのことを端的に示しているのが、武士の数が桁外れに多いという事実である。

明治四年の鹿児島県禄高調によれば、この当時の全国平均で士族の比率は約五パーセントなの

に対して、鹿児島のそれは約二十五パーセント。つまり薩摩藩の住民の四人に一人が士族であったことになる。

さらに明治七年に行なわれた調査（戸籍寮の戸口調査）では、全国の士族のうち十人に一人は鹿児島県士族であったという。幕末から明治初年にかけて、鹿児島県は日本全体の兵力の十分の一を保有していたというわけである。

だが、これで驚いてはいけない。「武士だらけ」とも言うべき薩摩の中で、都城が抱える武士は全人口のなんと四十二、三パーセントという驚愕の数字をはじき出していた。住民のほぼ半数が武士！　この数字は卒族（足軽や中間などの下級武士層）を繰り入れたものなのだが、それにしても多い。

今では農業、ことに畜産の盛んな土地として知られる都城だが、明治維新までのこの地は、まさに「武士の王国」であった。先ほどのデータを「住民の二人に一人が戦闘員である」という言い方で表わすならば、まさに都城は一種の軍事国家、軍事都市だった。

しかし、それにしてもなぜ薩摩、とりわけ都城はかくも武士の比率が高いのであろうか。

実は、こうした武士の多さは戦国時代においては格別、珍しいものではなかった。

戦いに明け暮れていた戦国時代においては、どこの国でも多くの戦闘員を必要としていたのだから、当然のことである。

戦国時代までの武士はそれぞれに領地を持ち、農地を経営して生活の糧を得ていた。足軽のよ

うな下級武士ともなれば、平時は農業を行ない、有事に武器を取って戦うという、いわば「兼業農家」の体であった。それゆえ戦闘員の集まりにくい農繁期には戦争ができなかった。

このような武士の在り方は、信長による「常備軍」の設立、そして豊臣秀吉の刀狩りによって大きく変化してゆく。信長は農繁期でも戦える軍団を作るために武士の専業化を図り、これに対して、秀吉は農民一揆を防ぐために、農民から武器を没収する。両者の行なった政策は意図こそまったく違うが、従来はっきりしていなかった武士階層と農民階層との線引きを明確にし、全国的に兵農分離が進む契機となったことでは共通している。

江戸時代に入ると、兵農分離はさらに徹底される。幕府が体制維持を図るために士農工商を根幹とする身分制度を固めたからだ。各地の大名は家臣を城下町に集めて住まわせ、余剰の人員は帰農させ武士の身分から外した。

この政策の定着には、豊臣政権から江戸初期にかけて日本各地で繰り返された大名の転封が一役買っていた。主君が国替を命じられると、家臣団は主に従って新天地に向かう者と、慣れ親しんだ土地に骨を埋める者とに分かれる。前者は武士となり後者は土着し、自然と「兵」と「農」とに分離された。

かくして武士は土地から切り離され、全国の武士比率は低下する。

江戸時代、将軍や藩主から領地を与えられ、自分の土地の農民を自身で監督し年貢を集める武士は一部に留まり、多くの者は農民が藩主の米倉に納めた年貢の中から、禄を受け取っていた。言い換えれば、受け取る物が米か金かの違いはあるものの、相当数の武士が現在の公務員やサラ

リーマンと同じ、「給与」の形式で暮らしていた、ということになる。
平時において必要なのは食糧生産をする農民であって、生産活動をせず消費するばかりの武士は最低限でいいのだから、これは時代の要請に応える政策でもあった。

ところが薩摩藩では、幕府の方針に反して武士を城下町のほか、藩内二十一の私領と九十二の外城に分散して住まわせていた。
鹿児島城下に住んでいた武士は「城下士」と呼ばれていたのに対して、外城に配置された武士は「郷士」、都城のような私領に属する武士は「家中士」と呼ばれた。家臣団のなかで城下士の占める割合は僅か十一パーセントに過ぎず、それ以外の武士が全体の八十九パーセントを占めていた。
一握りの武士だけが城下町に住み、残りの大多数の武士は農村部に住む――これは薩摩藩以外では見られない現象である。つまり薩摩藩だけは天下泰平の世の中にもかかわらず、戦国時代さながらの臨戦態勢を維持し続けていたことになる。薩摩藩の武士は時代の流れに抗して土地と強く結びつき、武士層はそのまま温存されていた。

本書の舞台となる都城は藩内二十一の「私領」の一つであった。
江戸時代、一万石以上の領地を有する者を大名、その領地を藩と呼んでいた。その定義からすれば、四万石弱という広大な都城は藩であり、都城島津家は大名ということになりそうだが、そ

うはならない。

薩摩藩の「公式見解」によれば、都城を含む藩内二十一の私領の藩主たちは、あくまでも島津宗家から領地の経営を「委託」された存在とされている。

ところが都城の人々には、自分たちが本藩の下に位置している、という意識が薄かった。

そもそもこの土地は都城島津家初代が勲功により足利家から賜ったもの、島津宗家から与えられたものではない。また一時期、別の場所へ移り住んだ時期はあるものの、幕末まで足掛け五百年以上住み続けているのだから「この土地は自分たちのものである」と、彼らが考えてしまうのも無理はなかった。

自立心旺盛な都城の人々の自信を支えていたのは「薩摩藩の米倉」と称された都城の経済力である。

盆地の中央には大淀川が流れ、そこから枝分かれした無数の川が、網の目のように縦横に延びている。水耕栽培に適していない薩摩藩の風土の中で、水に恵まれたこの土地は珍しい水田地帯だ。また、豊富な水が生みだす朝霧のおかげで茶の栽培も盛んで、南国らしからぬ光景が広がっていた。日差しを浴びて煌めく緑の盆地こそ、多くの「余剰人員」を抱え込む体力の源なのである。

さて、このように戦国とさして変わらぬ体制が維持されたとはいえ、平和な時代が続けば、尚武の気風は廃れ、理屈をこねるようになるのは世の常で、それは薩摩藩も変わらない。そこで薩

摩藩内では「郷中教育」と呼ばれる独特の方法で子弟教育が行なわれ、薩摩武士の心意気を継承するべく、努力していた。

郷中教育とは、郷中（家臣の居住区）ごとに少年たちが集まってともに学ぶ制度で、二才（十四、五歳～二十二、三歳）が、稚児（六、七歳～十四、五歳）を教え導き、議論よりも行動を尊ぶ気風を徹底的に体験してゆく。鹿児島城下同様に、都城にもこのような制度があった。

大久保利通の次男でのちに内大臣となり、若き日の昭和天皇を支えた牧野伸顕も、郷中教育を受けた一人だ。

〈「肝だめし」と称して、城山の上に墓地があったが、其処に夜一人で行かされる。途中で悪戯者におどかされたりして、なかなか恐かった〉

〈それからたしか「詮議」と言って、一種の口頭試験が時々行はれたが、これは例へば道を歩いて居る時に長屋から唾を吐いた者があって、それが自分に掛かった、その場合にどうするかとか、あるいは誰かに道で会って侮辱された、その場合どうするかとかいふやうなことを問はれるので、我々に常識を持たせ、臨機応変の措置を取ることを教へるといふ意味で行はれ、特に士族の威儀を仕込む意味もあったと思ふ〉（『回顧録』）

年長者たちは少年らに「議を言うな」と諭した。「議」とは「議論」であり、「理屈」である。薩摩藩では理詰めで物事を考えたり、相手を論破して自分の才能を誇るような人間は軽蔑され、無口であることが美徳とされた。

十歳になると少年たちは勉強のために聖堂に通うのだが、その途中で他の郷中の縄張りを通過

しなければならない。そんな時彼らの間で必ず争いが起きた。

〈私達の郷中は二十人くらいだったが、隣の平（ひら）といふ郷中は遥に優勢で、ここを通る時には相当な覚悟が必要だった。ある時、そのやうな衝突が起こって、私は溝に落ち込んだのを覚えて居る〉（『同上』）

溝から起き上がって何をすべきなのかは分かり切ったこと――このような独特な教育方法により、鎌倉武士の流れを汲（く）む、矜（ほこ）り高き薩摩武士の「美風」は、幕末まで受け継がれていった。

それにしても、自分勝手な体制を維持する薩摩藩に対して、なぜ幕府は介入を図らなかったのだろうか。幕末期に倒幕勢力の中心となったのが、他ならぬ薩摩であったことを思えば、この「虎」の牙を抜いておけば、江戸幕府の命運も違っていたのではないかと、ついつい考えてしまう。

しかし「古狸（ふるだぬき）」と称された徳川家康の深謀遠慮をもってしても、薩摩藩だけはとうとう押さえつけることができなかった。

というのも、天下分け目の戦いである関ヶ原において、薩摩藩は家康をも震撼させるような勇猛果敢な戦いぶりを見せたからである。そしてその記憶は江戸時代を通して、幕府や諸藩の武士たちに語り継がれてゆく。幕末期に薩摩藩が歴史の表舞台に立つずっと以前から、日本中の武士は薩摩武士に対して「いざとなれば何をするか分からない奴らである」という共通認識を抱いていた。

彼らの胸に兆す、不信と恐れの入り混じった複雑な感情――いったい島津隊は、関ヶ原においてどのような戦いをしたのだろうか。

慶長五（一六〇〇）年九月十五日午前四時、島津義弘率いる島津隊が関ヶ原に到着した。

第十六代島津宗家当主・義久は彼の兄、その後継者で次期島津宗家当主・忠恒（のちの家久）は彼の息子にあたる。

すでに六十六歳となっていた義弘は、当時としては相当な老人であるが、戦場を駆けまわることで鍛え上げた足腰はいまだに衰えを感じさせなかった。

小西行長、宇喜多秀家隊も相次いで顔を揃え、西軍（豊臣方）の陣容はほぼ整った。夜が明けるにつれ昨日から降り続いた雨はほぼ上がったが足元はぬかるみ、霧のために見通しがきわめて悪かった。

午前七時過ぎ、東軍（徳川方）の徳川家康四男・松平忠吉隊と井伊直政隊が宇喜多秀家隊に向かい攻撃を仕掛け、いよいよ合戦の火ぶたが落とされた。濃い霧の中、鬨の声や銃声が響き渡り、敵か味方かの区別がつかないまま無数の足音が地面を揺らした。

やがて霧が晴れ、周囲の状況がはっきりとしてきた。

この時、空から関ヶ原を見下ろせば、色とりどりの軍旗、指物、馬印が風になびき、華やかな祭りの会場さながらの光景が広がっていたはずだ。

明治初期に陸軍大学校教官として来日したドイツ人のヤコブ・メッケル少佐が、関ヶ原の陣営

配置図を見せられると即座に「西軍勝利」の判定を下したという逸話はあまりにも有名である。それほど西軍の布陣は有利であったし、武力においても勝っていた。

が、多くの武将の裏切りにより、西軍は敗北を喫した。死闘の裏でひそかに取り交わされるさまざまな駆け引き。関ヶ原の戦いは武力と武力の衝突というよりも、知力と謀略に彩られた人間ドラマそのものであった。その多くの登場人物の中でも、最も知力に溢れていたのは、勝者・徳川家康であったことは今さらいうまでもあるまい。

さて、この戦いにおいて、西軍島津義弘隊はまるで傍観者のように孤立していた。

史料によりばらつきはあるが、この日義弘に従った兵員は、千人から千五百人の間。薩摩から日向一帯を治め膨大な数の家臣団を抱えていた島津家にしてはいささか寂しい陣容であるが、一騎当千の彼らはこの大混戦の中、一歩も前へ出ることなく、ひたすら何事かを待っているかのようであった。そして、陣営に近づく者は西軍であれ東軍であれ、構わず撃退していた。

いったいなぜ、彼らはこのような不思議な戦い方をしていたのだろうか。

そもそも島津家の政治方針は中央政権とは一線を画し、自分たちだけの楽園・薩摩のみを守り抜くという独特なものである。織田や豊臣などのような、天下統一といった途方もない夢などは彼らには興味がない。この戦乱を利用して自領を増やしたいという企図はあったが、それも九州内の話であり、それ以上の領土欲はない。

なのに、こうして天下分け目の戦いに参加する仕儀に相成ったのは、たまたま義弘が伏見に滞

在中であったためである。そして、行きがかり上、西軍に引き込まれることになったが、本音をいえばこの合戦自体に参加したくなかった。島津は豊臣家再興だのといった御大層な大義にはとんと興味がない。大事なのはわが所領のみ。

とはいえ戦場でこのような振る舞い方はまことに紛らわしい。

島津隊を味方だと信じて逃げ込んできた宇喜多隊、小西隊までもが斬り払われ、宇喜多隊の多くは池寺池（いけでらいけ）に落ちて溺死した。

慶長五年九月十五日午後三時――開戦からおよそ八時間経過した今も、島津隊は関ヶ原にいた。すでに西軍は総崩れしつつあり、戦場にはぽつんと彼らのみ取り残される結果となった。東軍はジリジリと迫り来て、ついに彼らは敵方に取り囲まれてしまう。

いかにもやる気のない戦いぶりから想像がつくように、彼らは西軍に殉じて全員討ち死するつもりなどなかったが、さりとて、おめおめと白旗をあげて東軍に投降するつもりもなかった。

そこで彼らは「名誉ある撤退」を決意する。西軍への義理はすでに果たした。ここにとどまる理由はない。よって撤退するというわけである。

だが、それを見越した東軍は予想される二つの退路にすでに兵を集結している。このまま進めば袋の鼠となることは確実だった。義弘は目をつぶり耳をすませ、自らの進むべき方向を考えた。

そこで彼の得た結論は――敵中突破。

雲霞（うんか）のごとく満ちている敵の真っ只中に突っ込んで、戦場を離脱するなど通常の感覚ではありえない選択肢だった。だが百戦錬磨の義弘の直感は「どの退路をとっても敵が待ち構えているの

ならば、いっそ相手の意表を突いて、戦場の中央を突破せよ」と告げていた。
義弘は周囲の者たちを一団にまとめると、
「突き進め！」
と叫ぶや否や馬を走らせ、たちまち一団は立ち上る砂の塊となり猛然と敵陣中へと前進したのである。

何が起きたのだろう――東軍の誰もが呆然と島津隊の動きを見つめていた。それは島津隊に相対していた福島正則隊も同じである。
「敵ならば斬り通れ、さもなくば自らの腹を切れ！」
義弘の言葉に応じて島津隊は一斉に刀を抜き、福島隊の方向へと殺到した。島津隊は福島隊との斬り合いを覚悟していた。
だが、福島隊は思わず身を引き、島津隊の前に自然と道が開かれた。それはまさに海が割れ、道が現われたという「出エジプト記」モーセの話を地でゆく光景だった。
ちなみにこの時、福島正則の息子で、十七歳の正之が島津隊に立ち向かおうとして、家臣から諫められたという逸話が遺されている。
すでに勝敗は決している。死を覚悟し、目を血走らせて猛進する島津隊と戦っても何の意味もない。福島家の家臣は若様に「犬死してはなりませぬ」と教えたのだ。これは現在に生きる私たちにもうなずける、合理的な判断である。

しかし薩摩武士の考え方はまったく違っていた。彼らの内部には、合理的な思考では説明のできない、野性の血がたぎっていた。自分の死が有益なのか無益なのか、どう生きるのが得なのか、そのような小ざかしい線引きは彼らにとってはどうでもよい。

「薩摩の男はここぞと決めた時、ここぞと決めた場所で、自らの意志に従い死んでゆくのみ」

猛獣の群れと化した島津隊。気を呑まれて彼らを通過させた東軍は、ふと我に立ちかえり追撃を開始するが、後の祭り。義弘は主要な武将を次々と失いながらも、大垣から伊勢路を越え大坂へ落ち延びた。途中、大坂に留め置かれていた人質の妻子らを連れ戻し、九月の末に薩摩へと帰還した。

関ヶ原の合戦の直後から、家康による「戦後処理」が始まった。

家康に敵対する西軍に属していた諸大名には、領地の没収や移転、減封などの厳しい措置が取られた。

石田三成、小西行長、宇喜多秀家などの所領は没収。毛利輝元は中国地方九ヶ国、約百二十万石が周防・長門二ヶ国、約三十七万石になった。また、上杉景勝は会津百二十万石から米沢三十万石へ減封。西軍から吸い上げた土地は功績に応じて東軍側へ分配された。

こうした「始末」の最後の最後に、島津家が残った。

家康は島津義久の上洛を促した。関ヶ原の一件について「わび」を入れさせ、島津に恭順を誓わせようという腹であるのはいうまでもない。だが、島津家側はのらりくらりと返事をかわし、

いつまでも義久は上洛しようとしなかった。

これに怒った家康は島津討伐の命を出し、毛利家に先陣を務めさせようとしたが、「万が一、島津軍が勝ってしまっては元も子もない」と思って諦めた。ここで家康が毛利家に島津討伐の先陣を務めさせていれば、幕末の薩長同盟はなかったかもしれない。そう考えると家康のためらいは子孫のためにはなんとも惜しいことをしたものだ。

しかし、それは後知恵に過ぎない。

「薩摩の者どもはいざとなると何をするか分からない奴らだ」

関ヶ原での島津隊の非合理な行動は、鮮やかな血の色とともに家康や徳川家臣団の脳裏に強く刻みつけられていた。討伐をためらうのも当然であった。

こうした家康や諸侯のためらいを見透かしてか、交渉が長引くにつれて野獣の集団・薩摩は別の顔をのぞかせはじめる。

今度は「日明貿易の仲介者」という外交カードをちらつかせはじめたのだ。秀吉時代に悪化した周辺諸国との関係改善は徳川政権の最優先の課題であったが、なにせ外交経験が乏しく困り果てていた。中でも、幕府が重要視していたのが明との友好関係で、その仲介には琉球の力添えが必要だった。

すでに述べたとおり、薩摩は古くから東シナ海を通じて、琉球との関係が深い。島津家側は、幕府が琉球を通して明と関係を結びたがっていること、そのことを島津家から琉球側へ伝えてほ

しいこと、などの事情を熟知しており、完全に幕府の足元を見ていた。

関ヶ原で目の当たりにした血に飢えた狼の群れのごとき暴力集団と、緻密な交渉を地道に積み上げる冷静な頭脳集団とが同一の人々で構成されていることに、家康は底知れぬ不気味さを感じていた。

言うなれば合理と非合理が一人の人物のなかにすんなりと同居している矛盾、これこそ幕府や諸藩の武士たちが薩摩武士に対して抱いた懼(おそ)れの核心である。

慶長七（一六〇二）年四月、ついに家康側が折れて、島津の本領を安堵(あんど)する旨を明らかにして和平交渉は終結した。島津家は家康から無傷で薩摩を守り抜いたのだ。

家康としては不本意な講和であったが、新体制移行のため戦後処置を急いでいたのでしかたなかった。

都合のよいことに薩摩は江戸から最も遠い場所にある。しかも島津家には伝統的に中央政権への志向がない。この点も薩摩を考えるうえでは重要なポイントである。

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らの動きを眺めていると、あたかも戦国大名のすべてが京都に上ることを目指していたかのような錯覚に陥ってしまうが、島津一門の視線の先に京都があったことはない。

この世に薩摩ほど素晴らしい場所が他にあるだろうか。

鎌倉時代に彼らが薩摩の地に根付いてから彼らの確信は揺らぐことがなかった。薩摩の土地は都城のような特殊な地域を除けば、おおむね水耕栽培に向かない痩せた土地柄である。薩摩武士

が海に乗り出して行ったのも、海に魅力があったというよりも、土地から生み出されるものが余りにも少なく、海に出てゆくより他に生きるすべがなかったためだ。

それでも薩摩は、彼らの宇宙の中心であった。

彼らは彼らの楽園・薩摩に住み続けられれば、それで十分満足だった。だが、その願いはついに破られることになる。すなわち、黒船の来航である。

第三章　京の守護者

嘉永六年（一八五三）、浦賀沖に四隻の軍艦を率いて現われたペリーは、アメリカ大統領の国書を携え幕府に開国を迫った。これに対して、終始、無為無策であった幕府の在り方に危機感を覚えた各地の中・下級武士たちの間で、政治運動の連帯が急速に広がってゆく。

彼らは「志士」と呼ばれていた。

志士とは、論語の一節〈志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り〉（『論語』衛霊公篇）に由来する。己の身を殺しても、天下国家のために正しきことを成し遂げる、彼らの主張は瞬く間に全国各地に飛び火していった。

薩摩藩で志士運動の中核となったのは、名君と称されながら志半ばで亡くなった藩主・斉彬に見出され、その遺志を引き継ぐ若手下級武士の集団・精忠組だった。

西郷隆盛、大久保利通、有村俊斎（海江田信義）、吉井友実、伊地知正治、税所篤、有馬新七、奈良原繁、村田新八、野津鎮雄、野津道貫、大山綱良、西郷従道など、後に近代日本の要職を担

う人々の名前が綺羅、星のごとく連なっていた。

斉彬の死後、家督を継いだのは斉彬の実弟・久光の長男・忠義であった。後ろ盾を失った若者たちは藩政の行く末に希望を失い、集団で脱藩し京都に攻めのぼり、幕府寄りの公家や京都所司代を暗殺する計画を練った。

事前にそのことを知った藩主・忠義は、彼らを押しとどめる直筆の書状を送る。その書面で忠義が彼らのことを「精忠士」と称えたことが、精忠組の名前の由来とされている（誠忠組といわれる場合もある）。

彼らを称えることで無謀な計画を中止させ、結果的には自分の味方にまでつけてしまうという、老練な政治手法は若い忠義の判断ではない。実父であり後見人でもあった、「国主」島津久光の助言があったことは容易に想像がつく。

ところで、幕末を描いたテレビドラマにはかならずといってよいほど、若き日の西郷隆盛や大久保利通など精忠組の若者たちが、いかにも身なりに構わない様子で登場する。だが、史実はむしろ逆。

「ご一新」のあと、幕末維新を経験した人たちの貴重な談話を集めた資料に、薩摩藩の精忠組の若者たちに関して、次のような一節がある。

〈その人々の容貌は、従来の鹿児島風を脱しておりました、私どもも微（かす）かに記憶していますが、衣服もちょっと立派で、頭髪は昔時の詰め髻（びん）ではなく、わずか指一本入るくらいこれを高くし、

朱鞘白柄銀鞘尻で、我こそは誠忠派でござるといふ風に街頭を闊歩するさまは、なかなかの威勢でありました〉（『維新史料編纂会講演速記録 二』）

目立つ髪形の理由を質されると、澄まして〈鬢を大きくしなくては、他国に出て不都合だ〉（『史談会速記録』第十九輯）などと、うそぶいてもいたらしい。

彼らの姿が「都会的」であるといっても、それはあくまでも鹿児島の人々から見てのことであって、江戸の人々からすれば別の見解もあるかもしれない。だが意外にも、時代劇や小説が作り上げた印象とは裏腹に、彼らがお洒落に関心のある若者であったことは間違いがない。

また精忠組には、江戸へ遊学や勤務経験のある者たちが多く参加していた。彼らは江戸言葉を操ることができた。このことは志士運動のうえでとても重要だった。

江戸時代、ごく普通の武士が他藩の武士と書面で意思疎通を図るのは至極簡単なことであった。ところが会話となると途端にむずかしくなる。それぞれのお国言葉がきつく、相手の言葉が理解できないのだ。言葉はよそ者を見抜く戦略的な手段、各地域では固有の方言が大切に守られていた。その中でも、薩摩藩は一種の「言語鎖国」をしていたと評されるほどで、薩摩弁の難解さは外国語同然だったという。

そうした状況の中、江戸に出た経験のある若手の武士たちは江戸の言葉を話せるというだけで、下級武士とはいえ各地域の「国際派」の人々であったのだ。

さて、この精忠組の分派が都城にもあった。

都城島津家の家臣で、後に宮崎県選出の衆議院議員となる肥田景之は、政治運動に邁進する父親の活躍ぶりを子どもながらに鮮明に覚えている。

〈当時京師には、諸国の浪士や有志の人々相集って、勤王の説を主張する時でありますから、我が地方においても尊王説を唱へ士気を鼓舞いたしまして、是非勤王の士が闕下に馳せ上りて十分尽力を致すやうにしなければならぬといふやうなことを主張しておりました〉（『史談会速記録』第二百二十六輯）

まだ幼さの残る年頃の肥田の兄は、精忠組の幹部に可愛がってもらっていた。

〈安政三年に私の兄肥田景直と申す者が、生年まだ十四歳の時であります。これが、遊学に江戸に出まして、当時在府の西郷隆盛、海江田信義、有馬新七、有村勇助次左衛門、伊地知貞馨などといふ様な方々の指導を受けまして〉（『同上』）

西郷隆盛は、水戸藩の儒者で藩主の政治顧問でもあった藤田東湖と面会する際にも、景直少年を伴っていたという。魅力ある人々と出会い、すっかり彼らに感化された彼は、地元に戻ると少年たちを集め、精忠組の予備軍を組織した。かくして都城の志士運動は、ますます強化されていった。

ところで、精忠組の西郷隆盛や大久保利通は、下級武士とはいえ直接藩主に仕える城下士である。一方、都城精忠組の面々は私領の領主に仕える家中士であった。

元来両者の間には差がなかったが、時代が下るにつれて、城下士は郷士や家中士を見下すようになっていった。それゆえ都城精忠組のように、城下士と対等に付き合う例は珍しかった。しか

し、都城は薩摩藩の中でも特殊な地位を占めていたため、彼らは城下士に対しても臆することなく自由に振る舞っていた。

すでに述べたことの繰り返しになるが、都城は藩内最大の私領である。この地は都城島津家が宗家から運営を委託されていた土地であったが、都城島津家家臣団には、この土地を藩主・島津宗家から委託されたという意識はさらさらなかった。

そもそも都城は、初代当主・資忠が戦功により足利義詮から分け与えられたものであり、島津宗家から与えられたものではない——それが彼らにとっての都城なのである。彼にとって大事なのは「都城は先祖代々、自分たちが住み、耕してきた土地なのだ」ということだった。

都城は住民のほぼ半数が武士という、武士の王国である。

鹿児島から距離がある、薩摩藩の米倉と呼ばれるほどの土地であったことも、自立した雰囲気を醸成した一因だろう。人々の心の中に「本藩なにするものぞ」という気概が溢れていたのは当然すぎるほど当然であった。そもそも薩摩藩自体が日本の中で特異な存在なのに、そんな薩摩藩のなかでも特異なのだから、都城がどれほど個性の強い、いや強すぎる土地柄なのかが分かるだろう。

ここで少し幕末の都城島津家家臣団の生活ぶりをのぞいてみよう。

幕府の一国一城の令により都城の城は廃城となり、代わりに領主館を現在の都城市役所周辺に建設した。その周囲には家臣団の上級武士の住居区と、明からの移民の住む唐人町などの町場が

整備された。

島津一族は鹿児島城下の屋敷に妻子を住まわせ、所領との間を往き来した。都城の上級武士も当主に従い、鹿児島と都城の間を往復する生活を送っていた。

薩摩藩の武士の給与は、給地とよばれる知行地を与えられ、各自が年貢を取り立てる仕組みになっていた。その他に薩摩では、武士がみずから農業を行なうことも、土地を開墾することも認められている。

したがって、豊饒な土地に暮らす都城の下級武士たちは、表高（おもてだか）よりも自作の農地から得られる収入のほうが多い場合もあった。また、都城の上級武士たちは自分で耕作はしないものの、やはり表高以外に、大きな副収入を得ていた。

このような土地柄なので、おのずから武士と農民とを隔てる垣根は低い。いちおう村では道路を挟んで武士階級と農民の居住区が分かれており、祭礼の際などの桟敷も武士用と農民用とに分かれ、村の経営は武士の指導のもとに進められたが、だからといって両者が厳しく対立していたわけではなく協力しながら生活していた。

こうした農民と武士との共同生活を見守っていたのが、村のあちこちに置かれた「タノカンサア（田の神様）」と呼ばれる、高さ五十センチから一メートルほどの丸彫り・浮き彫りの石像であった。「神様」といっても社の中に安置されているのではなく、たいていは露台である。

立ったり踊ったりさまざまな形のものがある、素朴な神様は今でも旧薩摩領内のそこかしこに点在している。都城でも尋ねると、「あすきおいやっど（あそこにいらっしゃるよ）」と教えてもら

える。

このような生活の中で都城精忠組は、鹿児島精忠組と連携しながら運動の幅を広げていった。鹿児島城下にもまして、都城は無骨で愚直な武士像を尊ぶ土地柄である。彼らの行動は、さまざまな意味で評判を呼ぶ。たとえば、都会的な髪型や振る舞い方もその一つだ。年配者が彼らの身なりに眉をひそめていたことは想像に難くない。

保守層の渋い表情にもかかわらず、彼らがのびのびと活動できた裏には、都城島津家当主・久静（ひさなが）の存在があった。精忠組の動きを押しとどめようとした藩主・忠義とは逆に、久静は志士運動を側面から応援していた。

久静は前当主・久本（ひさもと）の長男で、室は島津久光の次女・於治（おはる）、つまり久静は久光の婿殿ということになる。当時久光は息子の後見役として藩政に力をふるう、いわば薩摩藩の事実上の支配者であった。その久光が政治上の相談相手として、最も信頼を置いていたのが婿の久静だった。

久静は思慮深く、物事の本質を見抜く目を持っていた。彼には現実の出来事の奥に、遥か未来の可能性を見出す力があった。このような才能もさることながら、何より人を惹きつけたのは、彼に生まれつき備わった華やかさだ。

久静が入ってくるだけで、部屋じゅうが明るくなった。人は彼に自然と心を開き、その周囲には陽気な笑い声が絶えなかった。これに対して久光は、宴会好きが多い薩摩武士にしては珍しく自室で一人静かにむずかしい本さえ読んでいれば幸せという内向的な人物、自身と異なる性質の

婿が可愛くまた誰より頼りにしていた。

藩内での久静の影響力は大きく、その庇護のもと都城精忠組は日本各地を思う存分駆け回ることができた。やがて時代は主従に思いがけない舞台を用意してくれる。それは幕末の動乱に揺れる、京都の御所警備という大任であった。

文久二（一八六二）年五月四日、鹿児島前の浜に蒸気船・天祐丸があたりを払う威容を見せていた。

天祐丸は薩摩藩が長崎で購入したイギリス船で、価格は十二万八千ドル、翌年に勃発した薩英戦争でイギリス側の放火により焼失する運命にある三隻のうちの一つである。艦上には船印として日の丸と、白地に紺色で島津宗家の家紋・丸十字が染め抜かれた旗が掲げられていた。

出発の時刻になり、港に姿を現わした当主・久静と三百名余の都城島津家家臣団は、足早に船内へ吸い込まれてゆく。一行はこれから長崎—平戸（ひらど）—博多などを経て大坂へ上陸し、伏見から京都へと向かうのだ。

在京中の久光から都城の島津家へ率兵（そっぺい）上京要請が届いたのは、ほんの十日ほど前のこと。

あいにく当主・久静は体調を崩し、霧島温泉にて療養中の身の上だった。立場が立場ゆえ、日頃の疲労が蓄積したためと推測される。しかし、早飛脚（はやびきゃく）で知らせを受けるや否や、彼は温泉を抜け出し鹿児島へと急ぐ。鹿児島には家老・北郷資雄以下三百余りの精鋭部隊が、彼の到着を待ち構えていた。

彼らが京都で遂行するべき任務は、御所の警備と町の治安維持だという。これほど重要な仕事を自分が任されることになろうとは、さすがの久静も想像すらしなかった。ましてや家臣たちは舞い上がり、一種の興奮状態になっていた。

それにしても、なぜ突然、薩摩藩の一私領の当主とその家臣が、帝のおそば近くに仕えるような、大それた任務を担当することになったのだろうか。話は二ヶ月前に遡る。

同年三月十六日、久光は一千余の兵を率いて上洛した。

混乱する世情を憂えた久光は、まず上京し勅諚を得て、その後江戸へ向かい幕政改革を促す決心をする。彼のいう「改革」とは、安政の大獄により粛清された兄・斉彬の盟友たち、開明派の大名の復権であった。

とはいえ無位無官の久光には東上する資格がない。そこでわざと江戸屋敷に火を放った。薩摩武士の行動にはためらいがない。この火事を理由に、薩摩藩は幕府へ参勤交代の延期を願い出た。目論見どおり許可が下りると、新しい屋敷の造営監督と参勤交代延期のお礼という名目で久光は出国を果たした。

このように東上計画は出だしからして相当に無謀なものであったが、めでたく進発と決まっても久光の前には難問が山積していた。

久光は宗家に生まれたが、次男ゆえにこの時まで一度も薩摩藩を出たことがなかった。すなわち、雄藩の大名にも有力公家にも親しい友人がいるわけではない。

しかも言葉の問題がある。大名は世子（跡継ぎ）時代を江戸屋敷で過ごすから、大名同士の会話は当然のことながら江戸言葉になる。江戸育ちの斉彬とは違い、久光にはこの江戸言葉もおぼつかない。

また、江戸城を中心とした上流階級では、洗練された立ち居振る舞いも要求されるのだが、その点でも久光は心もとない。しかるに久光は上洛して宮廷社会とも交渉したいとさえ考えているのだ。言葉遣いや作法に関して、武士以上に厳しい公家たちが冷ややかな視線や忍び笑いを久光にあびせかけるのは目に見えていた。

そこで藩内には久光の計画を危ぶむ声もあった。ことに西郷隆盛が反対した話は有名だ。

西郷は先代藩主・斉彬の命を受けて、諸大名家や公家などと交渉経験を持っていたから、率直に自分の経験から意見を述べたのだが、あまりにも忌憚がなさすぎた。西郷が言い放った一言を、久光は後々まで忘れることはなかったという。

「あなた様はお兄様と違ってまったくの『地五郎』なのだから、にわかに上京しても天下の名士たちと渡りあえるわけもござりますまい」

「地五郎」とは、薩摩地方の方言で田舎者という意味である。藩主の父に対して、西郷は遠慮するところがなかった。

だが、結論から言えば、西郷の予想は外れた。

当時の京都は、尊王攘夷論を唱える浪人たちが全国から集まり、不穏な空気に包まれていた。

久光東上の報は浪人たちに希望を与えた。関ヶ原における薩摩武士の勇猛果敢な戦いぶりを知らない者はない。「眠れる獅子がついに目覚めたか」と、浪人たちは色めきたった。

しかし、上洛した久光は浪人の期待を裏切った。彼は寺田屋に集結していた急進派の薩摩藩士を鎮圧し、たちまち京都の治安を安定させたのである。

また宮廷への働きかけにおいても、久光は成果を上げた。

当時の天皇は孝明天皇。残された記録から浮かび上がる孝明天皇は、感情に起伏があり好嫌の激しい人物である。それに比べて皇子の明治天皇は、はっきりと感情を表わさない、控えめなキャラクター。親子の性格の違いは鮮やかだ。

もしかしたら、明治天皇は父親の生き方から何か学ぶものがあって、表情や声色に自分の意志がにじむのを抑えていたのかもしれない。

それはさておき、久光の計画が成功するか否かは、孝明天皇が久光をどう評価するかにかかっていた。

天は久光に味方する。

二人は人間としての本質、周囲に流されることなく、あくまでも自分の意志を貫き通す点がとてもよく似ていた。首尾よく勅諚を得た久光は、勅使・大原重徳（しげとみ）に従い江戸へ向かい、幕府に改革を迫る運びとなった。その際、久光の代わりに京都の治安維持を誰かに任せる必要があった。

久光の頭に真っ先に浮かんだのは、都城島津家当主である婿殿・久静の顔だった。

久光は今、一世一代の大舞台の上にいた。自藩の下級武士・西郷隆盛にさえ、「地五郎」呼ば

わりされた彼が、あと一歩で名君の誉れが高い兄・斉彬の遺志を実現することができるのだ。絶対に失敗は許されない。久光が京の治安を安心して委ねられるのは、久静以外にはいなかった。

久静は久光の気持ちを十二分に理解し、病をおして天祐丸に乗り込んだ。

自分をここまで信頼してくれる義父・久光の期待に応えたいという気持ちがあったのも確かだ。だが、それ以上に彼を突き動かしていたのは、自分の実力がどれほどのものなのか、広い舞台で試してみたいという若者らしい野心だった。

ふと気がつくと、天祐丸が黒い煙を吐きながら波の上を滑りだした。振り返るとみるみる鹿児島が遠ざかり、やがて海上の点となり視界から消えた。

五月十三日、天祐丸は大坂へ到着した。

土佐堀の旧南部屋敷に入った久静は、京都の久光一行との間で連絡を取り合い、今後の方針を話し合うことになった。

またこれとは別に、久静は都城精忠組を関西方面に派遣していたので、彼らからの報告も受けていた。彼らは城下士の名義を借りて、以前からこの地域で情報収集を行なっていたのだ。彼らは沸騰寸前の京都の生々しい様子を語った。都は一筋縄ではいかない場所のようだ。

五月二十日、久静一行は京都に入った。

京雀の間では、久静に関するさまざまなうわさ話がささやかれ、人々の関心は最高潮に達する。一行の行列を眺めるため、沿道にはおびただしい数の見物人が押し掛けていた。久静は薩摩藩

の中でこそ有名だが、全国的な知名度はない。恐らく事前に都城精忠組あたりが、大げさにうわさをあちらこちらで振りまいていたのだろう。人々は固唾をのんで主役の登場を待った。

やがて衆人注視の中、ひときわ立派な馬に乗り颯爽と久静が登場した。

彼のまとっていた陣羽織は身ごろが鮮やかな緋色の羅紗、襟の部分は黒の天鵞絨製、首元を二重のフリルが飾っている。旧暦の五月半ばは新暦では六月半ばから七月初旬、京都の蒸し暑さが一番応える時期だ。久静は陣羽織の裏地を薄いブルーの生地で仕立てていた。沿道の人々が見上げると、馬上の久静の緋色の陣羽織の裾から、南国の海のように鮮やかな青色がこぼれる演出だった。異国情緒たっぷりの豪奢な衣装に人々の視線は釘付けになった。

久静がこの衣装をいつ誂えたのかは分からないが、急に注文して間に合う品物ではないので、一大事に備えて前々から整えておいたものだろう。豪華な衣装から久静の意気込みが伝わる。一陣の涼やかな風が通り抜けるような姿に、人々はしきりと歓声を上げた。

薩摩藩広しといえど、手紙一通で三百余の家臣を引き連れ京都まで馳せ参じるような財力、武力を兼ね備えている者は都城島津家当主・久静以外にはない。さぞや宮廷も歓迎してくれるかと思いきや、返ってきたのは冷たい反応だった。

公家社会から見ればそもそも久光でさえ新参者、ましてその婿殿などというまことに得体の知れない者に、御所を警護する重い役目を易々と与えてもよいものだろうか。彼らの目には不安の色が浮かんでいた。

さらに心配なのは都城隊の実力のほどだ。久光は千余りの兵力を用いて京都を抑えた。それに

引き替え都城隊は僅か三百名、三分の一にも満たない。そのうえ公家たちは、同じ薩摩藩士とはいえ、城下士と都城隊とはやや性質の異なる軍隊であることを見抜いていた。都城は鹿児島とは言葉が微妙に異なり、身なりも一段と野暮ったい。

都城の武士たちは薩摩藩内の他の諸郷の武士たちと同じく、表高の他に身分に応じて自作の農地を所有し、下級武士は自ら田畑に出て汗を流した。農作業により日焼けした彼らの肌は農民そのもの、歯と手の指の股だけがやけに白い。公家たちからすれば、とても藩内一の精鋭部隊とは思えなかった。

島津宗家の親戚筋にあたる近衛忠房（このえただふさ）は久光に対して、小松帯刀（たてわき）や大久保利通など京都の事情に明るい、若手城下士のリーダーたちのうちの誰か一人を置いてゆくように、と懇願している。

岩倉具視も、久静が警護に当たるならば増兵しなければ心もとない、と伝えてきた。孝明天皇の側近中の側近である岩倉の意見は聖慮に等しい。そのことを知った久静は色をなして怒った。

「薩摩藩第一の大身、島津岩見が京にあって事にあたるかぎり、叡慮（えいりょ）を悩まし奉ることは断じてありませぬ！」

自信に満ちた言葉からは、それとは裏腹に大役を前にしてともすれば不安に陥りそうになる自分を、懸命に鼓舞する痛々しい久静の姿が透けて見える。生命力に溢れる開放的な都城盆地とは異なり、京都盆地は翳（かげ）の統（す）べる空間、ここでは陽光も善意も志も生まれおちるそばから陰影を帯びる。かつて感じたことのない閉塞感が久静を襲った。

なんという皮肉なことだろうか、その二日後、つまり久光が江戸へ向かって出発したまさにその日、久静は倒れてしまう。

病名は麻疹、ハシカだった。潜伏期間を考えると、久静が麻疹に罹患したのは旅の途中と推測される。もともと病気療養中で体力の衰えていた久静は、疲労が重なりひとたまりもなく感染してしまったのだ。

五月二十三日、病に伏した久静を残して都城隊は京都藩邸に入った。京都藩邸は現在の同志社大学今出川（いまでがわ）キャンパスのあたりにあり、御所まではごく近い。病の身が宮中の清浄さを犯すことを遠慮し、久静は京都藩邸ではなく、伏見御仮屋（旅宿文殊屋四郎宅）において治療に専念することになった。

家老・北郷資雄の指揮のもと、都城隊は禁裏・京都警護の仕事を開始した。

前年鹿児島調練場で行なわれた藩の歩兵練習の総括責任者が久静であったことから、都城島津家では三部隊を組織し、馬回り隊とともに日々の訓練に励んできた。公家社会からは軽く見られていることをつゆほども知らぬ都城隊は、今こそ精進の成果を見せる絶好の機会とばかりに、張り切って任務に邁進した。

一方、伏見御仮屋にはさまざまな医者が呼び込まれていた。だが、久静の顔を見るなり皆一様に首を横に振った。うだるような暑さのなか、久静は高熱のために震えていた。

それはあまりにもあっけない幕切れだった。

五月二十六日、都城島津家当主・久静は三十一歳の生涯を閉じた。医者を押しのけて、家臣た

ちは久静の遺骸に取りすがった。ことに久静を唯一の希望の星と仰いできた、都城精忠組は呆然と立ち尽くすしかない。

協議の末、久静の死は隠されることになった。都城隊のうち二百名は何食わぬ顔で禁裏・京都警護の職を全うし、残り百名がひそかに久静の遺体を都城へ連れ帰るという段取りだった。

都城隊には、主君の死を悲しんでいる暇はなかった。

まずは帰国組と残留組の名簿が作られた。次いで帰国の日程が慌ただしく組まれた。並行して久静の棺も整えられることになった。悲しみに溺れるのを恐れるように、家臣団はくるくると動き回った。

福山平左衛門はわざわざ大坂へ出向き棺の作製を依頼している。

棺といえば普通は木製であったが、久静の死は伏せられていたので、白木ではいかにも棺桶だと分かって具合が悪い。さりとて家臣としてはそれなりの支度はしたい。また長期間の運搬となるのでしっかりした素材で、しかも相当な大きさが必要だ。夏場のことゆえ、遺体の保存についても考えに入れなければならない。

さまざまなことを考慮して、福山は錫（すず）製の品を誂えた。ところが、いざでき上がると困った事態が起きた。

「うむむ……、重すぎる」

久静を安置するとなると、移動は不可能。店側はよもや棺として使うなどとは、考えていなか

ったのだろう。
「これではいかん。もそっと、軽い品に換えてほしい」
結局、彼が持ち帰ったのはブリキ製の箱だった。
六月二日、帰国組本隊は伏見を出発。旅の名目は北郷蔵人が病気になり帰国するという触れ込みなので、残留組の家臣たちは殿様の黄泉(よみ)への旅路を見送ることさえはばかられた。なんということだろうか、家臣たちの自慢の種であった薩摩一華麗な殿様は、粗末なブリキの棺に覆われて、荷物のようにひっそりと宿屋から運び出された。
主君の去った京都で、都城精忠組は都城隊に加わり任務を遂行していた。
浪人たちの動きを封じ込めるため、久静の死を気取られてはならない。薩摩から交代要員が駆け付けるまでの期間、都城隊は藩の指示を仰ぎつつ、たった二百人で見知らぬ京都の町の治安を一身に背負わなければならなかった。
暗がりからいきなり刃を突きつけられる恐怖と内心闘いながら、彼らは辻々を見回った。むずかしい仕事をこなしながらも、彼らの表情は明るく冗談さえ言い合っていた。彼らの言動から主君が亡くなったと察する者はいない。
心配することは何もなかった。
公家社会が都城隊を見つめる目は、日を追うごとに変わってゆく。
心の襞(ひだ)に痛みをしまい込み、普段と変わらぬ振る舞いができる彼らを、単なる田舎者と蔑(さげす)む者はいなくなった。特に岩倉具視は彼らを高く評価し、維新の際、自身の警護を都城隊に任せてい

る。都城の武士が幕末の京都や伏見、維新後の東京などで活躍するための土台、人的ネットワークはこの滞在中に築かれていた。

そうしてみれば、島津久静の客死はけっして無駄にならなかったといえる。

さて、久光の上京から始まった一連の出来事を境に、宮廷と薩摩藩は急接近した。

雅な宮廷社会とどこか血のにおいのする薩摩藩とでは、一見すると水と油。だが、近世日本の中でしぶとく生き続けた二つの中世は、底流で通じあうものがあった。両者は不思議なほど息のあった手さばきで、明治日本への扉をひらいてゆく。短い期間とはいえ、都城島津家家臣団が主君の死を秘してまで果たした役割は小さくない。

都城精忠組は久光本隊とともに一足先に上京していたので、京都の地理に明るく裏道に至るまで頭の中にしっかりと入っていた。市内警邏の当番では、自然と仲間を先導する役回りになる。

京都の町に淀むどっしりとした空気は、想いを遺して亡くなった人々の無念、野心、祈り、怨念、秘められた恋のため息などが入り混じって醸し出される独特のものだ。そのような時代の澱とも余韻ともつかないものが、都の魅力を生み出していた。

久静の想いもまた、この町を漂っているのだろうか。いやそれはあるまい。久静の想いはまっすぐ都城へ帰ったはずだ。この世で薩摩ほど素晴らしい場所はないし、その中でも都城ほど美しい場所は他にないのだから。

彼らが見上げる先には、澄んだ青い空が白い雲を浮かべ、久静の棺が辿り着いた緑輝く大地の

上へと続いていた。収穫の季節がそこまで来ている。農作業は進んでいるのだろうか。帝のおわす荘厳な御所の塀の前で、彼らはしきりと自分の田畑の様子を気にしていた。

第四章　薩英戦争

この会談が決裂すれば、薩摩藩とイギリスは再び戦火を交えることになる――。

文久三（一八六三）年十月五日昼下がり、横浜の外国人居留区にあったイギリス公使館はただならぬ緊張感に支配されていた。

外国人居留区といっても当時の横浜は道幅も狭く、外国人たちの住まいも簡素な木造平屋建てがほとんどであったが、イギリス公使館は二階建てで相当の広さがあった。

駐日イギリス外交部に勤務していたアーネスト・サトウの回想録『一外交官の見た明治維新』によれば、現在の「横浜人形の家」のあたりに建物があったようだ。今では目の前に海が広がり付近には山下公園や港の見える丘公園などが点在する絶好のデートスポットだが、この頃はまだ漁村の風情を残していた。

三ヶ月ほど前に起こった薩英戦争の和平交渉は、この公使館を舞台にすでに二回行なわれていたが、双方が持論を繰り返すばかりで一向に着地点を見出せなかった。

イギリス側は三回目にあたるこの日の会合で合意できなければ話し合いを打ち切ると、事前に日本側に申し入れてきた。

これを聞いた会談の立会人である幕府外国方の役人や、薩摩藩の支藩である佐土原藩（現在の宮崎市周辺）の藩士たちは「すわ一大事」とばかりに慌てふためいたが、薩摩藩から送り込まれた交渉役の重野厚之丞（重野安繹）は落ち着き払った様子だった。

重野はのちに実証主義を唱え、歴史学者として帝国大学教授となる人物で、残された写真によれば学者らしく几帳面そうな印象を受けるが、冷静沈着な風貌の下には剛胆さを持ち合わせていた。

重野の落ち着きぶりには、それなりの理由があった。

そもそも、交渉事においては、結論を急ぐ側のほうが分が悪い。

イギリス外交部は幕府を脅しつけてさまざまな要求を通してきたが、一地方勢力にすぎない薩摩藩に対して同じ手法が通用しないので困惑していた。一方的に期限を切った高圧的態度は、イギリス側の焦りを示している。これは薩摩にとっては危機ではなく、むしろチャンスだ。

イギリス外交部のトップは代理公使ニールで、休暇で一時帰国中の公使・オールコックに代わり、一連の事態の発端となった生麦事件から薩英戦争までの陣頭指揮をとっていた。

若手外交官のアーネスト・サトウは、上司であったニールについて〈身長は普通のイギリス人よりずっと低く、半白の口髭をはやし、額の辺に薄い一つかみの白髪がたれていた。気むずかし

く、疑り深い性質だった〉（『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳）と述べている。

張りつめた空気に満ちた公使館の応接室で、ニールの横顔に微かな戸惑いの色を読みとった重野は交渉の成功を確信し、おもむろに口を開く。

「本日は賠償金の件を友好的に話し合いたい。ついては賠償金と引き換えに、我がほうから貴殿らに申し入れたき条件が二つあります」

ニールらは息をつめて重野の次の言葉を待った。

「一つ目は貴国から軍艦を買い入れたいから周旋をお願いしたい。二つ目は、貴国軍艦内に収監されている我が藩の士官両人を引き渡してほしい」

通訳に耳を傾けていたニールの瞳は次第に大きく見開いていった。重野の申し出のうち、後者の条件、士官の引き渡しの件はすんなりと解決できる。けれども軍艦購入の件はあまりにも思いがけなかった。交戦相手に対して、貴国の優れた武器を譲ってほしいという「講和条件」など、ヨーロッパ外交において百戦錬磨の経験を持つイギリス人でさえ、かつて経験したことがない。薩摩の真の狙いは何なのか、ニールの頭のなかは混乱した。

重野はさらに言葉をつなぐ。

「二つの条件さえ承諾してくだされば、わが薩摩と貴国との懇親は一層厚くなるというもの。私どもも喜んで賠償金をお支払いできます。以上のことは、我々が熟慮のうえで出した結論ですから、貴国側でもぜひご承引ください。もしも不承知ということであれば、談判はこれにて終わりといたしましょう」

軍艦を譲ってくれれば今すぐにでも講和を結びましょう、それが無理なら談判決裂、もうひと合戦してもよい、……なんという勝手な言い草だろうか。ニールらはぽかんと口を開けたまま、思わず顔を見合わせた。

薩摩武士は近世日本の異端児である。

近世の武士道は儒教や禅に基づく倫理観を土台としているが、薩摩武士はこのような形での武士道を行動原理としなかった。それゆえに彼らは明治維新という革命を成功させることができた、これが本書の考え方である。

このように述べると多くの方々から異論が寄せられるだろう。

国家の行く末のために自らの命を投げだした薩摩武士の行動は、しばしば武士の鑑と評されてきた。その代表選手が西郷隆盛だ。現在でも書店の棚には西郷隆盛に関する本がずらりと並べられ、根強い人気を誇っている。

無教会主義を唱えた思想家で、文学者でもあった内村鑑三はキリスト教社会から「異教徒」と呼ばれている日本人の中にも、道徳的、倫理的に優れた人物がいることを欧米人に示すために、英語で『代表的日本人』を著わし五人の日本人を紹介しているが、その五人の筆頭に挙げられているのが、西郷隆盛である。

内村は同書の中で、明治維新における西郷の業績を〈ある意味で一八六八年の日本の維新革命は、西郷の革命であったと称してよいと思われます〉（岩波文庫、訳・鈴木範久）と高く評価して

いる。内村は西郷を「最後のサムライ」と呼び、西郷の行動の底流には陽明学と禅の素養があると指摘する。

武士道をキリスト教倫理に匹敵する、優れた行動規範だと考えるのは、内村だけではない。内村と同じく、キリスト教信者であった新渡戸稲造もまた、外国人向けに日本文化を紹介した著作『武士道』のなかで、武士道を支える柱として神道、仏教（ことに禅）、儒教（ことに陽明学）を挙げて説明している。

近世の武士道とは内村や新渡戸が著作で述べたように儒教や禅の思想に基づき、忠誠心や自己犠牲などを重んじる道徳観念であるというのが、私たちの持っているごく一般的な見解であるし、実際、佐幕派、討幕派ともにほとんどの武士の行動原理はこれによっていた。

だが、そうした中にあって「大いなる例外」と言うべき存在があった。ほかでもない、島津家を主君として仰ぐ薩摩藩の人々である。

すでに述べたように、薩摩藩は江戸時代初期に大名家の入れ替えが行なわれた他藩と異なり、鎌倉時代より七百年もの間一つの家の支配が続く。このため表面的には幕藩体制を受け入れながらも、藩の構造の中に中世の色合いが濃く残り、そこで暮らす武士たちの精神構造もまた中世の武士の面影を留めていた。

薩摩武士はすでに失われた「中世武士道」を江戸末期まで守り続けた奇跡の集団である。

広く知られているとおり、中世の武士は領主から賜った土地のために命を懸けた。いわゆる「一所懸命」である。彼らにとっての命をかけて守るべきは何よりも目の前にある「領地」であ

って、それに比べれば、目には見えない大義や忠孝の精神など、二の次、三の次であった。
明治の文化人たちが褒めそやした、高い精神性を特徴とする近世の武士道は天下泰平の世に形成されたもの。戦争に明け暮れた戦国武士とはよって立つ世界が違う。形ある土地を拠り所とした薩摩武士は、理念よりも目の前にある現実を重んじるリアリストの集団。形のない精神性を拠り所とした近世の武士たちとは、武士としての矜りの在り方そのものが異なるのだ。

このような彼らの特性がいかんなく発揮された好例が、冒頭で触れた薩英戦争の戦後交渉だ。軍艦購入の斡旋を講和条件の一つとした薩摩側の申し出に、イギリス側はどう応じたのだろうか。(以下の記述はイギリス側史料としてアーネスト・サトウの日記抄である荻原延壽著『遠い崖』と回想録『一外交官の見た明治維新』、薩摩藩側史料として『薩藩海軍史』を参考にしている)。

我に返ったニールは慌て、言葉を選びながら「なぜ貴藩は軍艦がご入用なのか」と尋ねた。
すると重野は堂々と、
「我が藩にはこれまで軍艦が一艘もなく、貴国が周旋を図ってくだされば、我々も面目を施し、主君への申し訳が立つというもの」
「また、貴国のような軍艦は我が藩どころか、そもそも日本に一艘もない、ぜひとも斡旋をお願いしたい」
熱心に軍艦の性能をほめちぎる重野の瞳はきらきらと輝き、ニールらをさらに唖然とさせた。それというのは他でもない、英国の戦艦の砲撃によって薩摩の町が灰燼と化していたからである。

世界広しといえど、自分たちの故郷を焼き払った武器のその性能に惚れこんで、面と向かって敵方に武器をねだる者がどこにいようか。薩摩武士の構想力の飛躍はあまりにも大きすぎて、常人には計り知れない。

そもそも薩英戦争は前年の八月に武州生麦村で起きたイギリス人貿易商・リチャードソン殺傷事件、いわゆる生麦事件に端を発している。

事実上の国主・島津久光の行列に、たまたま出くわしたイギリス人男女四人の乗った馬が突っ込み、列を乱されたことに怒った藩士たちがリチャードソンを斬り殺し、他の二人にも重傷を負わせた。

これに対して駐日代理公使ニールは本国の指示のもと、賠償を請求してきた。

幕府に対しては公式の謝罪と賠償金十万ポンド、薩摩藩に対してはイギリス海軍士官立会いのもとの犯人処刑と賠償金二万五千ポンドという内容だった。十万ポンドは約四十万ドル、二万五千ポンドは約十万ドル（六万三百三十三両一歩）、はいそうですかと右から左へ払えるような金額ではない。

幕府はのらりくらりと話をかわす戦術に出たが、ニールがイギリス極東艦隊の主力を横浜港に集結させるや否や、アヘン戦争の悪夢が脳裏に浮かびたちまち態度を軟化させた。

しかし一方の薩摩藩は「非はイギリス側にある」として断固、支払いを拒否した。

といっても、薩摩が賠償を拒んだのは、けっして排外主義や国粋主義ゆえではない。

彼らの言い分は「リチャードソンらを殺傷したのは彼らが外国人であったからではない。彼らが日本の国法を守らなかったがゆえに斬ったのだ」というものであった。武士の往来を妨害すれば、斬り殺されても仕方がないというのはたしかにそのとおりである。

もちろん、こうした薩摩の「正論」に対して、分別がないと批判することは可能だ。行列を乱したのが町人であるならばともかく、相手は異人ではないか。国内法よりも外交関係のほうを優先するのが当然だろう、とは当時の幕府も考えた。

しかし、薩摩の感覚は違う。

「我らがイギリスに行けば、イギリスの法を守らなくてはいけないのと同様、イギリス人もこの日の本にあっては日の本の法を守るのが当然。それだけのこと」というのが薩摩の感覚である。攘夷でもないし、卑屈になることもない。法は法——薩摩人の考えはどこまでも地に足がついている。

だが、この時のイギリスは、薩摩がそうした「道理」から賠償金を拒否しているとはつゆほども想像していなかった。万事において口先だけは勇敢でも、実は腰抜けの幕府と同様、「圧力をかければ、サツマも折れる」とイギリス人たちは踏む。

事実、徳川幕府はペリーの来航以来、欧米勢の要求に屈し続けてきたといっても過言ではない。攘夷派の公家や諸藩から煽られると、その時は強気になったりもするが、最後には欧米の要求に従うか、従わないまでも問題を先送りにし続けてきた。

だからイギリス代理公使ニールは、薩摩を見くびった。

文久三年六月二十七日、七隻の英国艦隊を率いて鹿児島湾に侵入した時も、ニールは戦争などするつもりはさらさらなかった。どんなに勇猛なことを言っていても、蒸気船を見れば薩摩の武士たちは仰天して、平伏するだろうと高をくくっていたのである。

ところが案に相違して、艦隊が現われても薩摩側は態度を変えない。そこで、イギリスは薩摩藩所有の三隻の蒸気船を拿捕する作戦に出た。

聞くところによれば、三隻の蒸気船を入手するために薩摩藩が払った額は三十万八千ドルであるという。かたやイギリスの求めている賠償金は約十万ドル（二万五千ポンド）。いくら彼らが愚か者であろうと「虎の子」の汽船を差し押さえられては、賠償金を払わざるをえないだろうとイギリス側が考えたのも当然だ。

ところが、である。

七月二日正午、薩摩藩は蒸気船の拿捕を宣戦布告と捉えて戦端を開く。

そこでイギリス側も、拿捕した蒸気船を爆破したうえで艦砲射撃を始めた。艦隊の大砲は火を噴き、折からの強風にあおられ鹿児島城下はあっという間に炎に包まれた。

しかし、それでも薩摩は降伏しないので、イギリスは困った。

こういう事態に発展するとは夢にも思っていなかったので、イギリス艦隊は長期にわたって戦争を継続できるだけの燃料や食糧の備えをしていなかったのである。

そこで、イギリス艦隊は七月四日に碇を揚げて横浜へ帰ることになったのだが、どう見ても、この一戦はイギリス側の圧勝だった。ニールらが和平交渉の行方について楽観視していたのは、無理もない。

だが、その予測もまた見事に覆される。薩摩藩は自らの正当性を主張し、なかなか折れようとしない。それどころか、こともあろうに「イギリスの軍艦を買いたい」と言い出す始末だ。

予測不可能な薩摩側の対応に、イギリス側はさぞかし業を煮やしたかと思いきや、案外そうでもない。むしろ、奇妙なことにイギリス人たちの顔色は次第に明るくなってゆく。そもそも、自国の軍艦をここまで誉められれば悪い気はしない。心なしか身を乗り出し機嫌も良くなってきた。

英国「軍艦をご入用とのことだが、いったい誰と戦争をするのですか」

薩摩「今、これといって敵はないが、軍艦は有事のために備えておきたい。また一艘だけでなく、追々数艘注文したいのだがいかに」

ニールはやや考え込み、やがてひたと正面を見据えた。

英国「軍艦の売買は、兵士を売買するのと同じこと。請け合いかねます」

決定的な一言に薩摩側は思わず沈黙した。

これを見たニールは眉を開き、重野の困った顔を楽しむように目を細め、さりながら……と続けた。

英国「我が政府に不用の軍艦があれば、許しを得たうえでお売りできるかもしれません」

緊迫した会場の空気は一転、妙になごやかな雰囲気に変わる。

いつしか両者は立会人の幕府の役人をそっちのけで、軍艦購入に関する具体的な項目を熱心に話し合い出した。

軍艦の大きさ、値段、建設に要する日数、果てはイギリスより船の運航や武器の扱いに慣れた者を薩摩へ派遣しノウハウを伝授するところまで、トントン拍子に話は進む。

もはやこれは和平交渉ではなく、商談と呼ぶべき内容であった。

だが、薩摩の人々の「交渉上手」は、これで終わらない。

「貴国の軍艦を買いたい」という申し出はたしかにイギリスにとっては嬉しい話ではあったが、しかし、ここは外交交渉の場である。イギリスとて筋を通さないわけにはいかぬ。

そこでイギリスはふたたび、肝心の賠償金の話を持ち出した。すると薩摩側はあっけらかんと「今は手許に金がない、幕府から借りるから数日待ってほしい」と言い放つではないか。

屈託のない薩摩側の態度を見ると、いかにも幕府との間で根回しが済んでいるのだろうと考えてしまうが、実際は違う。

薩摩藩は幕府へ借金を申し入れていたが、返事を保留されていた。幕府の立場になれば、勝手に外国と戦争をして、今度は賠償金が払えないから金を貸せとは随分無茶な話、返事を渋るのもうなずける。

要するに、あと数日あれば幕府から金を引き出せるという、薩摩の言葉には確証はない。にもかかわらず、幕府の役人の面前でこのような約束をしてしまうのは、幕府首脳へプレッシャーを

与えるためでもあった。これにより幕府は、賠償金の問題から無関係ではいられまい。なんという厚顔さであろうか。幕府の役人の辟易(へきえき)とした表情が目に浮かぶ。

ニールは部下のサトウにさえ〈気むずかしく、疑り深い性質〉と評された男だ。幕府と薩摩の間の深い溝に気づかないはずはない。

ところが、あろうことかニールは薩摩案を快諾する。彼は、事なかれ主義の幕府はイギリスとの関係悪化を極度に恐れている、薩摩に大金を出してでも和平を贖(あがな)うはずだ、と踏んだのだ。

これで交渉はめでたく終わった。だがよく考えてみると、イギリス側が薩摩藩に突き付けた要求のうち賠償金は確かに一応の決着をみたが、もう一つの件――イギリス人貿易商・リチャードソンを殺害した犯人をイギリス海軍士官立会いのもと処刑する――、生麦事件の本質とも言うべき肝心要の件は未解決のままだ。

もちろん、イギリス外交部はこの件に関しても追及したが、薩摩側は申し訳なさそうな表情を浮かべ、下手人を捜索したがどうしても見つからない、と言ったきり取り付く島がなかった。ニールらはこの言いわけを頭から信用していなかったが、これ以上この件で争ってもイギリス側が得るものは少ないと判断し、生麦事件の犯人の件を不問に付した。

かくして薩摩とイギリスとの間には、いつしか和気藹々(あいあい)とした雰囲気が生まれた。

この時、イギリス側は知らないうちに、すっかり薩摩藩の術中にはまってしまったといってもよいだろう。

イギリス外交部は薩摩藩の意表を突く申し出に翻弄されているうちに、自覚のないまま、自然と敵国である薩摩藩への信頼を深めてゆく。

今回の戦争で鹿児島の町は焼かれ、三十万八千ドルで購入した虎の子の蒸気船も煙と消えた。経済的な視点でのみ比べると、イギリスへの賠償金の支払いを拒んで薩英戦争に至った薩摩藩の損害は幕府よりも遥かに大きい。その点においては幕府の選択のほうが合理的ではあった。

しかしイギリス外交部は、さっさと賠償金を払った幕府よりも、自分たちを散々手こずらせたあげくに、軍艦買い入れまでを申し出た薩摩藩のほうを確かな交渉相手として認める。

合理と非合理が一人の人物の中にすんなりと同居している矛盾――旗本や他藩の武士たちを懼れさせた「負のカード」がひらりと裏返り、「正のカード」としてイギリス外交部を惹きつけた。これを境に薩摩藩とイギリス外交部は急接近し、時代は一気に動き出す。

ところで、十万ドルの賠償金を幕府から借りるほど、手元不如意だったはずの薩摩藩が、どうしてイギリスから最新鋭の軍艦を何隻も購入する約束をできたのか、疑問を抱く方もあるかもしれない。

だが、ご心配には及ばない。薩摩藩の財布は、他の人が払ってくれる場合には空っぽなのだが、ほしい物があればどこからともなくカネが出てくるという、まことに都合のいい、不思議な仕掛けになっていた。

実際、薩英戦争ののち、薩摩藩ではイギリスの支援のもと、大胆な軍事改革が行なわれ、兵備の西洋化が大きく進む。薩摩は三百諸藩の中でも、最新鋭の武器を有する軍隊を保持することに

なった。

もちろん我らが都城の人々が、こうした新しい動きに対して積極果敢に動かないわけはない。

薩英戦争終結の翌々年に当たる慶応二（一八六六）年三月、都城島津家は重信弥一郎ら数人を長崎に派遣し、英式兵法を学ばせるとともに洋式銃を数百挺購入した。

また、薩摩藩では慶応三（一八六七）年、長崎において一括購入したミニエー銃一万挺を藩士の持ち高に応じて強制的に割り当てている。当時の日本においては最新鋭の銃であるのだから、もちろん高価で、藩士たちにとっては相当な負担であったと推測されるが、藩からの割り当てとは別に、都城ではさらにミニエー銃を買い足している。

〈小銃も長崎辺で最初はわずかに二三百挺といふくらいの注文をして居りましたけれども、これも二大隊以上、三四千挺くらいの備えもできまして〉（『史談会速記録』第二百八十輯）

藩全体で一万挺にもかかわらず、一私領の都城で三、四千挺所有しているというのはいかにも多い。しかし負けず嫌いで、新しもの好きな彼らにとってはけっして多すぎる数ではない。彼らの美学では、武士たる者は一流の身なりで戦場に向かうべきなのである。新品のミニエー銃を手に入れた彼らは、都城領内の数ヶ所に設けられた訓練場や射撃場などで、実戦さながらの軍事演習に余念がなかった。事が起これば、藩内で一番勇猛果敢な者どもが誰なのか、はっきりさせてやるのだと彼らはしきりと息巻く。

そしてその望みのとおり、彼らがふたたび京師の地を踏む時が近づいてきていた。

第五章　日本最強の部隊

久静の死から五年後の慶応三（一八六七）年十一月七日、大坂土佐堀の船着場に薩摩藩士たちの一団が到着した。

そのなかに、若者ばかりで構成された、ひときわ威勢のよい小隊があった。都城島津家家臣団である。彼らはこの年の七月に藩の命を受けて都城で新たに編成された部隊で、総勢百二十一名の大半を十代後半から二十代の若者が占めていた。

大坂で彼らを出迎えたのは、辻々に満ちる「ええじゃないか」の掛け声だった。

ええじゃないかはお札降りをきっかけに民衆が集まり踊るという騒動で、夏ごろから全国的に広まっていた。たいていの場合まず寺社のお札が降り、その後お札降りがあった家では施行（せぎょう）を行ない、近隣の人々が押し掛け、祭りのように踊り明かすという段取りであった。

囃子（はやし）に合わせて町を練り歩く人々をよくよく眺めると、男は女装を女は男装をしている。情報収集のために大坂入りしていた駐日イギリス外交部の通訳生アーネスト・サトウも、この光景に

出くわしたという。

〈家という家は色とりどりの餅、みかん、小さな袋、藁、花などで飾られている。着物はたいてい赤いちりめんだが、なかには青や紫のものもある〉（萩原延壽『遠い崖』六）

夜遊びに出たサトウらがお目当ての店に着くと、主な部屋はみな踊りの集団に占拠されていた。

〈私たちが立ったまま、部屋の交渉をしているところへ、踊り狂った若者連中や子供たちの一団が、とても華美な衣裳の丸々とした人形をのせた轎をまん中にかついで、あちらこちらに揺り立てながら、ぞろぞろと入ってきた。その家にいた宴会のお客はみな、（中略）家の部屋部屋を仕切る襖の敷居のところへ迎いに出てきた。そして、居合わせた者が一緒に踊り狂ったのち、イイジャナイカの一団は再び姿を消した〉（『一外交官の見た明治維新』）

凍てつく空の下、頭に提灯をかざし夢中で乱舞する人々は、まるで燃え盛る松明から飛び散った火の粉のようだ。小さな集団同士が街角で合流し、踊りの列は次第に長くなる。

「ええじゃないか！　ええじゃないか！」

「ええじゃないか！　ええじゃないか！」

社会の地殻変動により溢れだした民衆のエネルギーが、大坂の夜空を赤く染めていた。

この年の五月、幕府が兵庫開港に踏み切ると、薩摩藩上層部は討幕へと舵を切った。

今までの本書の流れからすると、本来は「国際派」であるべき薩摩藩上層部がなぜ兵庫開港に反対し、それを口実に討幕へと進むのか、その理由が分かりづらい。

黒船以前から貿易に積極的な薩摩藩からすれば、兵庫開港はむしろよろこばしいことなのではないだろうか。同じような疑問を抱いたアーネスト・サトウの問いに、西郷隆盛が明快に答えている。

〈西郷　わたしの主君は、兵庫開港そのものには反対ではありませんが、兵庫を他の条約港とおなじやりかたで開港することには反対です。つまり、われわれは、兵庫が日本全体の利益となるような仕方で開港されることを望んでいるのであって、たんに幕府の私利をこやすために兵庫が開港されることを望んではいないのです。

サトウ　というと、あなたがたは、どういう方法で兵庫を開港しようというのですか。

西郷　兵庫開港に関連する一切の事項を、五名ないし六名の大名からなる委員会の手にゆだねることによってです。そうすれば、この委員会は、幕府が利益を独占するために勝手に行動するのを防ぐことができるでしょう〉（『遠い崖』四）

最も重要なのは次の点だろう。

〈西郷　兵庫は、われわれにとって、きわめて重要な港です。われわれはみな大坂の商人に金を借りています。それを返済するために、われわれは毎年藩の物産を大坂の商人に送りとどけなければなりません。もしも兵庫が横浜とおなじ仕方で開港されるならば、われわれの財政は大混乱をきたすでしょう。

サトウ　なぜあなたがたが兵庫をそれほど重視するのか、よくわかりました。兵庫問題は、あなたがたの最後の拠点なのですね〉（『同上』）

確かに兵庫港は彼らの最後の砦だった。

すでに幕府は西洋諸国と通商条約を結び、横浜をはじめとする諸港を順次開いていた。この結果、外国船は琉球を素通りして、本土の港へ直接に向かうため、鎖国政策を逆手にとって貿易を柱の一つにしてきた薩摩藩の財政は大きな打撃を受けた。そのうえ、背後に金融都市・大坂を控えた兵庫港までもが幕府の管理下に置かれ、そこから生み出される利益を幕府が一元管理するとなれば、薩摩藩の経済は間違いなく破綻する。

だが、第十五代将軍・徳川慶喜は兵庫港を横浜と同様の方式で開港し、利益を独占する考えだった。

彼は諸外国に兵庫開港を宣言し、朝廷の承認を得るため着々と準備を進めてゆく。前年末に慶喜が将軍職に就くのと前後し孝明天皇が崩御する。まだ少年の明治天皇が玉座に即くと、頑なに攘夷にこだわった先帝の御代と異なり、宮廷から開港の承認を得る可能性は高くなっていた。

そもそも、慶喜と薩摩藩の関係は複雑だ。

久光の兄で名君の誉れ高い先代藩主・斉彬は、病弱な第十三代将軍家定の後継者に水戸徳川家の一橋慶喜を推し、その実現のために奔走していた。ところが、第十四代将軍には紀伊藩主だった家茂が就くことになり、慶喜を擁立していた斉彬自身も急逝する。この結果、安政の大獄の嵐が吹き荒れ、一橋派は粛清の憂き目に遭ってしまう。

そんな彼らの復権に尽力したのが、斉彬の実弟である久光だった。

斉彬と久光とは薩摩島津家第二十八代当主の座を巡って、ともに担がれた過去がある。結果、当主は兄・斉彬となったわけだが、兄弟仲は不思議なほどに良好だった。斉彬は久光の堅実な人柄や学識を高く評価し、藩主となってからは何かと相談を持ちかけていた。一方の久光も多才で華やかな存在である兄を深く尊敬していた。二人はおたがいに自分にないものを相手に見出して、支え合っていたという。

それゆえ斉彬没後、事実上の国主となった久光が打ち出した基本方針は斉彬路線の継承であった。彼は他の雄藩と語らい、一橋派の復権に尽力する。

しかし、実際に慶喜が復権して幕政を握ると、たちまち彼らは失望を味わう。久光らは慶喜に対して、雄藩をも参加した形での新しい政治体制の構築を望んでいたが、慶喜が行なったのは揺らいだ幕府体制を再構築すること。そこに雄藩の出番はない。

このような経緯があったから、なおさら兵庫開港問題はおたがいに絶対譲れない、政争の核心となったのである。

島津久光（薩摩）、松平春嶽（越前）、山内容堂（土佐）、伊達宗城（宇和島）は揃って上洛し、兵庫開港承認問題を先送りし、長州藩処分問題を解決すべきだとの建言をまとめた。

幕府は第一次長州征伐で恭順の意を示した同藩にとどめを刺そうと、第二次長州征伐を計画したが、反対に各地で長州軍に敗北し、先代将軍・家茂の死をきっかけに撤兵した状況になっていた。この長州の件を蒸し返すことにより、雄藩側は幕府の弱体化を天下にさらそうという作戦である。

だが、慶喜は四侯の建言を退け、宮廷に圧力をかけて兵庫開港の承認を得る。四侯側も力を尽くしたが、有栖川宮家出身の生母を持つ慶喜への宮廷側の信頼を覆すことはできなかった。慶喜との間に亀裂が入ったまま、久光らは京都を後にする。

後になって振り返ってみれば、まさにここが討幕への分岐点となった。

というのも、六月に入ると薩摩藩は討幕の検討に入り、九月に入り長州藩、安芸藩（広島）との間で出兵協定を結んだからである。

薩摩藩と過激な攘夷思想を唱えていた長州藩とは長年反目し合っていたが、四ヶ国連合艦隊の下関砲撃により攘夷が容易でないことを悟った長州藩が藩論を転換すると、土佐藩を脱藩した坂本龍馬、中岡慎太郎らの仲介で、薩長両藩は密約を結び同盟関係となっていた。

討幕挙兵計画は、㈠薩摩軍が三田尻へ向かう、㈡それを合図に長州軍と安芸軍も出発、㈢三藩が大坂に到着するや在京の薩摩・安芸軍が御所を抑え「一挙奪玉（一気に『玉』＝天皇を奪い）」、㈣二条城、大坂城を抑え込む、というもので決行は九月末ときまった。

複雑な政治情勢ゆえに前置きが長くなったが、本章の冒頭に登場した都城隊は、このような流れを受けて結成された。

言うまでもなく、この都城隊結成の目的は倒幕にある。

武士の王国・都城はかねてより長崎で三、四千挺のミニエー銃を買い込み、藩内でも最新鋭の装備を整え、来るべき日に備えていた。

それゆえ藩から出兵要請が下ると、日頃の成果を試す機会がいよいよ到来したと上を下への大騒動になった。前回の上京は久静や朝廷の護衛役であり、しかも久静が客死するというアクシデントもあったが、今回の上京はいよいよ都城島津家の本領発揮になるに違いない。彼らは千人規模で出陣する心づもりであった。

ところが、他の地域との釣り合いを考えた藩から一小隊に制限され、幹部たちは頭を抱えてしまう。折角の機会を目の前に、涙をのんだ志願者も多かったという。

そんな騒動もあったが、七月六日、都城隊の隊士たちは鹿児島へ向け出発する。

彼らは紺色木綿製の筒袖野羽織と、同じく紺色木綿製のパッチの組み合わせに身を固めていた。これらは都城島津家から支給されたもので、精一杯西洋式を取り入れた当時としては最新式の品々だった。他にも彼らには西洋式銃、制服の着替え、合羽（雨具）、与力提灯、ワッパ（弁当箱）、水筒などが支給されている。

我々は日本一強い部隊である。

冗談ではなく、彼らは本気でそう考えていた。藩主催の実弾訓練が行なわれた際、彼らの腕前は鹿児島城下でも評判を呼び、藩主・忠義から特別お褒めの言葉があったほどだ。日本一強い武士の揃った薩摩藩の中でも特別なのだから、つまり我々は日本のなかで一番強いのだ、というのが彼らの言い分だった。以後、彼らの動きを、籠谷真智子著『都城と戊辰戦争』、『都城市史』などを参考に追ってゆこう。

明日にも出陣する勢いで鹿児島に乗り込んだ都城隊であったが、藩からの出撃命令は一向に下

らず、そのまま彼らは秋までとどめ置かれることになった。久光や忠義が推し進めようとした討幕挙兵計画に、藩内から異論が噴出したのだ。主な要因は財政難だった。

されど、長州藩、安芸藩との約束もある。困った薩摩藩上層部は一足先に外城や私領の藩士たちを中心とした部隊を出発させることにした。これならば財政問題もとりあえず回避できる。都城隊もここに組み込まれることになった。

十月三日、三隻の蒸気船が鹿児島を出港。

兵員の数は史料によって異なるが、本書では一千人程度としておこう。船の中に、都城隊の面々の雄姿が見られたことはいうまでもない。

十月八日、薩摩部隊は長州藩三田尻に到着。

ところがここから先がまた長かった。一行は中之関に移動させられ、二週間ほど艦内に過ごす羽目に陥る。薩摩藩本隊の出発の遅れから、挙兵計画全体を見直す必要が出てきたからだ。都城隊はぼんやりと一日中海ばかりを眺めて過ごしていた。

十月二十三日、西郷隆盛、大久保利通、小松帯刀らが艦内に姿を見せる。

大政奉還という大ニュースを知らされ、艦内は大いにどよめく。この時、西郷らは討幕の密勅も携(たずさ)えていたが、そのことを知らされた者は限られていた。

続いて西郷らから一同へ命令が下された。都城隊らの乗船していた三隻の蒸気船は鹿児島へとんぼ返りして、藩主・忠義をはじめ残りの部隊を乗せて上京する。ついては艦内の者は全員下船

し、長州藩の船を借りて大坂へ先行するように、と。

こうして、都城隊のほとんどの者は何が何だか分からないうちに蒸気船を下ろされ、長州藩が用意してくれた早船に詰め込まれ、冒頭で述べたように大坂に到着した。その後、彼らは別部隊とともに西本願寺別院に駐屯し、周辺地域の警邏任務に就く。

十一月二十三日、藩主・忠義が兵を率いて京都薩摩藩邸に到着。

忠義が率いた兵員の数も史料によって異なり、千人から三千人の幅がある。薩摩藩と呼吸を合わせるように長州藩、安芸藩の兵も続々と上京し、あとは討幕を実行するまでとなった。

十二月九日、王政復古の大号令を発する。

激動する幕末日本、その渦中にあって都城隊の活躍ぶりはいかばかりといえば、さにあらず。王政復古の翌日、十二月十日に彼らは本隊に編入され、西本願寺別院から伏見屯所（下板橋西詰堺町）へ移動し、そこで相変わらず淡々と周辺地域の警護にあたっていた。驚いたことにサトウの日記によれば、大坂の街角にはいまだに「ええじゃないか」の掛け声が響き渡っていたという。

〈祭りが続いているので、町という町は夜になっても煌々と明るく、ひとびとはまだ踊りくるっている。しかし、もう祭りにはうんざりだ〉（『遠い崖』六）

サトウ同様に都城隊の隊士も、夜毎に流れるお囃子の音に嫌気が差していた。時折彼らはこの祭りが永遠に続き、近所の警護と軍事演習を繰り返す自分たちの生活もまた永遠に終わらないのではと不安に駆られた。

だが、どんな祭りにもかならず終わりは訪れる。
十二月十二日、慶喜が二条城から大坂城へ退却した。ついに幕府は京都から撤退することになったのだ。

この事態の急激な変化を受けて、伏見の警備を担当していた都城隊に大きな災難が降りかかる。
あの新撰組が京都を引き上げ、伏見奉行所を拠点に周辺地域の守護に乗り出したのだ。
改めて説明するまでもないが、新撰組は幕府によって集められた浪士組を基にする組織で、隊員には武芸に秀でた者たちが採用されていた。その後、京都守護職・松平容保（かたもり）（会津藩主）御預かりとなり、名称を浪士隊から新撰組と改め、京都守護や反幕府勢力の制圧にあたった。
もともと寄せ集め集団であった彼らは厳しい内部規律を課しており、違反した者は誰であろうと粛清された。中核メンバーであった伊東甲子太郎（きねたろう）も討幕派と気脈を通じたとして、脱隊したのちに暗殺されている。新撰組は伊東の背後で薩摩藩が糸を引いたとみて、それ以後、深い恨みを抱いていた。そんな新撰組と同じ縄張りで仕事をするというのだから、なんとも厄介なことになったものだ。
ただでさえ忙しい都城隊に、さらなる仕事が加わる。
都城隊は半数ずつ左、右二班に分けられ、本来の任務の他に、京都九条の東寺（とうじ）におかれた本営役所警衛にも駆り出されることになった。本営勤務の際には朝五時に東寺に到着し、夕方伏見の屯所へ戻るという強行軍だ。

なぜこのような仕事がまわってきたかといえば、都城隊が京都の町に慣れているためだ。これまでも薩摩藩士は城下士を中心に、久光とともに何度か上京していたが、藩邸などで過ごすことが多く京都の町の一部しか知らない。まして外城や私領の武士たちに至っては、初めて上京したという者がほとんどだ。そのなかで、京都警備の経験のある都城隊の存在は貴重だった。

そのうえ都城隊は、鳥羽街道方面と宇治方面の警邏も担当することになった。能力のある人のもとへ仕事が集まるのは世の常、それにしても分量が多い。

しかし彼らは喜んで新たな任務も抱え込んでしまう。

都城隊はまだ暗いうちから起き出し、紺色木綿の上着とパッチを着こみ、防寒用に同じく紺色木綿の袷野羽織をはおり、刀吊の白木綿帯を腰のあたりでびしっと決めた。帯は前結びにして端はそのままたらし、左肩には背負袋をかけ、頭の上から頭巾をかぶる。

動きやすく作られた軍装は京都の冬にはやや薄着で、南国育ちの薩摩藩士たちの中には身を縮めている者もあったが、都城隊は平気だった。霧深い都城盆地の気候は京都のそれとよく似ている。冬になると霜柱が大地を押し上げ、人々はザクザクと音を立てながら道を行き交うのだ。

身支度のなかで一番肝心なのは目印である。

薩摩藩は全員に肩章または腕章を配布したが、真似されて悪用される恐れがあるため、その他にも目印になるものを身につけ、それをたびたび変更していた。

都城隊が当初用いていたのは白湯手つまり手拭いで、ある時は鉢巻風に頭に後ろ結びをし、またある時は肩や腕に結ぶなどさまざまな工夫をこらしている。隊員同士左右を見回し本日の目印

を確認すると、お互いの無事を祈りつつ各々の仕事場へと散っていった。

ところで、薩摩藩は幕末になって軍制を改めて制服を定めていたが、多くの藩では軍服が統一されておらず、また浪人や農民から兵を募ることもあったので、同じ藩内でも同士討ちが起きるのはしょっちゅうだった。同じ藩でもそうなのだから、遠目に他藩の武士を見て、どこの藩の者か見分けるのは至難のわざ。

都城島津家の記録を見ても、伏見警備がなかなか簡単ではなかったことが知られる。それによれば、不審者に出会った場合の対応として、㈠「どこの藩の者か」と問い「長州藩だ」と言われたので通した、㈡加賀藩の紋章をつけていたので、よく分からないけれども多分加賀藩だと思って通した、などの例が報告されている。

これでは相手方に騙す気があれば、言い繕って簡単に検問をすり抜けることができる。一触即発の緊急事態かと思いきや、予想に反してのんびりとした雰囲気が漂っている。革命とは勇ましいように聞こえるが、案外、現場はこんなものなのかもしれない。

実際、敵対する新撰組とも激しい争いは起こらず、近所の風呂屋で鉢合わせすることもしばしばだったが、おたがいすんなりとやり過ごしていた。むしろ新撰組にとっては内輪もめのほうが問題であった。都城隊の記録でも、局長・近藤勇が発砲を受けて暗殺されそうになった現場の目撃談が残されている。それによれば近藤は「あっ」と声を上げ鞍の前輪にうつぶせになり、役屋敷まで馬で駆け込んだとある。

十二月二十七日、都城隊の半隊が天皇臨席のもと行なわれた、共同軍事演習に参加している。

この日新政府は建春門外にて、薩摩、長州、土佐、安芸藩の部隊に演習を行なわせた。『明治天皇紀』によれば、まず土佐藩が約二十人ずつ二小隊で運動を行ない、次いで安芸藩が約二十人ずつ四小隊で運動を行ない、長州藩は約四百人で大隊運動を行なったという。

最後はいよいよ薩摩藩の番だ。やや頬を紅潮させた都城隊の隊士の顔も見える。揃いの服を着て整列した薩摩藩士たちは他藩の度肝を抜こうと、演技が始まる前からすでにわくわくしていた。

一瞬の静けさののち、会場に大音量の西洋音楽が響き渡った。

イギリス式に兵制を改めた薩摩藩は、各小隊に大太鼓役、小太鼓役、喇叭(ラッパ)役、笛手役など楽器を扱う役目を置き、大隊行進の際には各小隊の楽士が一つに集められ軍楽隊を構成し、先頭に立ち西洋の行進曲を演奏していた。

音楽のリズムに乗り、なんと千五百人もの兵士が隊列を組んで歩き出した。頭に丁髷(ちょんまげ)をのせて西洋の音楽を奏でている楽士や、それに合わせてやはり頭に丁髷をのせた藩士たちが、手足を振り大真面目に行進している姿を思い浮かべるとなんとも面白い。

勇壮な行進曲と、兵士たちが大地を踏みしめる足音が重なりあい、一つのメロディーを作りだす。御簾(みす)越しに会場を眺めていた明治天皇はそれを心地よく聞いた。

天皇はこの時、満十五歳、白い絹の着物に緋色の袴をつけ、頭には普段用の冠をかぶり、手には扇をにぎっている。顔には白粉(おしろい)を施し、頬紅、口紅を差し、剃った眉の上の方に眉を描きつけ、歯を鉄漿(おはぐろ)で染めていた。伝統的な衣装に身を包んだ若き天皇は、この日から崩御の日まで彼の傍(かた)

らで絶えず鳴り響くことになる勇ましいリズムに耳を傾けた。
怒鳴りつけるような号令に従い、兵士たちの足音は右へ左へと動いてゆく。やがて兵士たちの足音がぴたりと止まり、再び駆け出すと地鳴りがした。明治天皇の治世で初めての戦争が、あと数日で始まろうとしていた。

慶応四年一月二日、幕府軍は京都へ向けて進軍を開始した。
王政復古ののち、新政権内では慶喜の処遇を巡ってせめぎ合いが続き、状況は慶喜に有利に展開しつつあった。
もし彼が新政権内に復帰するようなことになれば、薩摩や長州は苦境に立たされてしまう。そんな時都合よく起こったのが、庄内藩による江戸薩摩藩邸焼討ち事件だ。
三田にあった薩摩藩の藩邸を、庄内藩が砲撃したこの事件は、浪人たちを使った薩摩藩の攪乱(かくらん)作戦に庄内藩がまんまと乗ってしまった結果だといわれている。だが、その一方で、幕府側の主戦論者たちが開戦の口実にされると承知のうえで、庄内藩もあえて攻撃したという説もある。
いずれが真相であれ、「薩摩藩邸焼討ち」の知らせを聞き、かねてより京都からの退却に内心不満を募らせていた幕臣たちの中から「薩摩討つべし」の声が沸き起こり、抑えきれない事態となった。
戦国武士の荒ぶる魂を幕末まで保ち続けた薩摩武士は例外として、平和な時代が続く間に他藩の藩士は牙を抜かれた獣のように大人しくなっていた。されど彼らもやはり武士だった。抑えつ

けられてきたものが爆発すると、それをきっかけに彼らのなかで眠っていた野性が一気に目を覚ます。一度火がついてしまえば、彼らは行きつくところまで行くしかない。

この時、慶喜は風邪で寝込んでいたが、事情を伝え聞き、開戦に難色を示した。

おそらく彼の体内にも先祖から受け継いだ野性の種が眠っていたはずだが、同時に彼のなかには母方から受け継いだ皇室に繋がる、高貴な「紫の血」も流れていた。それゆえか彼の体温はきわめて低く、野性の種は一向に芽吹く気配がない。慶喜は頭から布団をかぶり、激情にかられる家臣たちを冷ややかに眺めていた。

寝巻のまま着替えようとしない慶喜を置き去りにして幕府軍は動き出す。これにより新政権側は討幕の口実を得たが、幕府軍一万五千余りに対して新政権側の兵力は三分の一程度、圧倒的に幕府軍のほうが有利であった。

両軍激突の事態に、いよいよ「日本一強い部隊」都城隊にも出番が巡ってくる。

肥田景之の証言を通して、彼らの奮戦ぶりを眺めてゆこう。肥田はこの時まだ十七歳、都城隊には応募者が殺到したため一家から一人しか参加できないことになっていたが、彼は関係者を拝み倒して兄とともに上京する。運命の日、肥田は仲間十名とともに岩倉具視の護衛を担当していた。彼らは参内する岩倉のお供で御所へ向かい、紫宸殿（ししんでん）御常御所の側まで同行したという。

その後、宮門傍で岩倉の帰りをじっと待っている彼らに、「幕府軍起（た）つ」との情報が伝わったが、なにせ任務中なので動けない。夜になって岩倉とともに御所をさがり、彼らにあてがわれた

岩倉家内の長屋の二階にいると、そこから薩摩藩士たちが鳥羽・伏見へ繰り出してゆく様子が見えた。若者たちはいても立ってもいられない。

「こんなところで悠長にお公家様の警護をしている場合ではない」

「今すぐ出陣だ！」

騒ぎ立てる一同をなだめすかし、交代要員が来るまで待ってくれと、肥田は押しとどめた。翌朝六時半に交代要員が顔をのぞかせると、彼らは直ちに薩摩藩本営の置かれていた東寺まで駆け付けたが、すでに本隊は出陣した後だった。肥田らは本隊を追って走り出した。

一月三日午後五時、鳥羽方面で銃撃戦が始まった。

大目付・瀧川具知が鳥羽街道を北上し入京しようとしたところ、薩摩軍との間で押し問答となり、強引に通過しようとした瀧川に対して薩摩側が発砲する形で戦闘状態に入った。両者の間で激しい撃ち合いとなったが、日が暮れて周囲が暗くなったことからひとまず戦いは終わった。

初陣を飾る絶好の機会にもかかわらず、肥田兄弟は竹田街道周辺の警備に回されたため、戦端が開いたのを知らずにいた。彼らが本隊に戻ると、すでに敵の姿はなかった。

しきりと悔しがる肥田の兄に、友人の野津鎮雄が声をかけてきた。

野津は後に陸軍中将となり、弟の道貫は陸軍元帥となる。野津はにこやかに肩を抱くと、

「そこら辺に、敵の死骸が累々としておる。外に分捕の大小銃もたくさんあるから見てみろよ」

と、やや自慢げに戦況をこまごまと教えてくれた。

このような話を聞くと薩摩武士としては、自分も是非ひと働きせねばと思ってしまう。丁度そ

の時、暗闇の彼方から銃声が響く。肥田兄弟は反射的に音の聞こえた方向へと走りだした。周囲は暗闇、若者たちは前後に注意を払いながら道を進んだ。

〈途中軍装している、二十三十の者にしばしば出会いましたけれども、皆味方と心得、敵とは気付かなかった、その時の合印(あいじるし)は白木綿で襷(たすき)を掛けた、ところが敵も同様の襷、同様の印しをしておったために私等は虎口を逃れた〉(『史談会速記録』第二百八十輯)

敵味方双方が同じ印をつけていたので、おたがいに相手のことを味方だと思っていたとは笑い話だが、この肥田兄弟一行は若者ばかり十五人ほど、怖いもの知らずの大冒険はまだまだ続く。

竹田街道沿いの町に入ると、右の方に兵士が整列していた。彼らはまたしても味方だと思いこみ悠然と歩いていると、突如後ろから銃撃を受けた。敵だった。彼らは慌てて反撃を試みる。どうやら敵は大勢のようだ。彼らは適当にパラパラと撃ちかけ、追手がこないのを幸いに一目散にその場を逃げだした。

やっとの思いで伏見の薩摩藩邸につくと、屋敷から火の手が上がっていた。

鳥羽方面と時を同じくして、伏見でも銃撃戦が繰り広げられ、火災により町の南部は焼き払われたという。

「お前ら、どうしてここに来た」

ふいに、物陰から薩摩藩士が顔をのぞかせた。そこで彼らが得意げに大冒険の経緯を説明すると、

「それはいかん、実に危険だ。そこいらに賊軍がうようよおるぞ」

と諫められた。事情が分かると急に怖くなる。同じ道でも帰りは恐る恐る進むため、相当な時間がかかってしまった。彼らが本営に帰ったのは未明すぎ、そっと足をしのばせて体を横たえた。

一月四日、仁和寺宮嘉彰親王が征討大将軍に就任し、天皇から錦旗、節刀を賜った。

その足で仁和寺宮は錦旗を翻し、東寺へと入る。錦旗の出現に薩長陣営は奮い立ち、日和見を決め込んでいた藩は選択を迫られることになった。

まず伏見の淀藩がよろめいた。

淀藩はぴたりと城門を閉ざし、幕府軍を入城させなかった。淀藩は譜代の大名家で、藩主は時の老中・稲葉正邦、いわば現職閣僚である。殿様は江戸にいて留守中で、重臣たちが入城を拒んだとはいえ、幕府側の受けた衝撃は計り知れない。ここから裏切りの連鎖が始まった。

ところで、これほど皆が崇める錦旗だが、実は宮中に伝わる伝統的な品でも何でもない。

錦旗は岩倉具視と大久保利通が相談のうえ、国学者の玉松操が大江匡房『皇旗考』をもとに作図し、大久保の妾のおゆうが京都で買った生地を、長州藩の品川弥二郎が萩へ持ち帰り、地元の有職師に縫わせたという代物である。品川はのちにドイツ公使や内務大臣、枢密顧問官などを歴任する人物だ。

秘密裏に作られたという割には多くの人の手を経ており、どこか文化祭の展示物でも作るような楽しげな雰囲気さえ感じられる。このような代物が、官軍か賊軍かを見分けるリトマス試験紙の役目を果たしてしまうのだから不思議なからくりとしかいいようがない。岩倉、大久保、品川

トリオは、プロパガンダの魔術師だった。
錦旗の威力は絶大で、幕府側の士気は日を追うごとに低下した。
兵力でまさる幕府軍が味方の裏切りにより敗走する——。
この構図はどこかで見た。そう、関ヶ原の戦いの構図とすこぶる似ているのだ。
鳥羽・伏見の戦いと関ヶ原の戦いは、一枚の写真のネガとポジのような関係で、東軍（徳川）と西軍（島津・毛利）の攻守が入れ替わっているのがミソだ。相手側の裏切りを誘発してもぎとった徳川の天下が、自らの譜代の臣の裏切りにより失われようとしていた。

錦旗のもと、都城隊も奮戦中。
戦いの二日目、肥田少年らはこの日も朝から右往左往する。
まず伏見の方へ向かったが御所の方から砲撃が聞こえ、すわ一大事とばかりに走りだすも、官軍が潜伏中の幕府軍を攻撃したものと分かり、今度は下鳥羽へと西へ急ぐ。
下鳥羽から、その南の淀にかけては砲撃が激しいのだが、竹が茂っていて敵味方の区別がつかない。兄の言いつけで肥田が周囲を探索していたところ、竹藪から歌声が聞こえ、ふとそちらを見ると名前を呼ばれた。薩摩藩の高島鞆之助（ともの すけ）である。高島はのちに陸軍軍人となり、陸軍大臣、枢密顧問官などを歴任する。
高島に誘われ、ともに戦おうとすると、頃合いを見計らったかのように長州藩の山田顕義（あきよし）隊が現われた。山田は法典編纂に尽力し、のちに司法大臣を務める。山田隊は太鼓を打ち鳴らし軍歌

を歌いながら敵中へ飛び込んでゆく。だが意気込みほどには強くなかったようで、肥田らは慌てて加勢をしている。のちに衆議院議員となる肥田のネットワークは、この戦時下で作られたものだともいえる。

戦争の三日目、彼らは朝から疲れていた。

前夜は敵と対峙したまま、竹林に野営を張った。冬山の寒さはたとえようもなく、さすがの都城隊も霜に苦しめられ、寝不足のうちに朝を迎えた。日が昇り凍りついた手足が温まると、彼らは淀堤まで進軍する。

すでにそこは激戦場で、多くの負傷者が出ていた。

血のにおい、うめき声、砲撃の音。前夜の疲れはたちまち吹っ飛び、彼らのなかの野性が騒ぎ出す。肥田兄弟ら二十人ばかりの若者は、他の隊を押しのけ薩長軍の先頭に出た。

ところが、堤の下には九十ばかりの伏兵が彼らを待ち構えていた。たちまち、敵も味方も分からないまま大乱闘が始まった。咄嗟のことで、肥田は敵と対峙したまま、斬ることも突くこともできない。彼らの頭の上を弾丸が飛び交う。

ふと気がつくと、肥田の頭から血が激しく噴き出している。傷口を手拭いで押さえていると、仲間が駆けつけ両側から助け起こしてくれたが、そこから先の記憶が途絶え……。

我に返ると、そこは病院だった。

彼は病床で兄が亡くなったことを知らされた。肥田の兄は部下の負傷者を避難させようと肩を貸したところを、敵から狙撃を受け耳をやられたという。それでも彼は前線に復帰し、今度は真

正面から二発の弾丸を受け亡くなった。こよなく兄を尊敬していた肥田は悲しいというよりも、ただ呆然とした。思わず目を閉じると頭が割れるように痛い。

肥田少年は生まれてはじめて戦争というものの本質に触れた気がしていた。

一月六日夜、慶喜は大坂城に幕府軍諸隊の主だった者を集めた。

戦いが始まってからこの日まで、彼は風邪と称して大坂城を一歩も出ない。大広間に集まった人々は口々に戦いの続行を叫び、慶喜自身の出馬をしきりと願った。

その声に押されるように、ついに慶喜が口を開く。

「されば、これより出立すべし。一同、用意をせよ」

先頭に立って自ら戦う意思を示した慶喜の言葉に、広間は歓喜に包まれた。おたがいに決死の覚悟で戦い抜こうと誓いあい、急ピッチで出陣の準備が始まった。ところが、である。

〈予はその隙に伊賀・肥後・越中（松平定敬）らわずかに四、五人をしたがえて、ひそかに大坂城の後門より脱け出でたり。城門にては衛兵の咎むることもやといたく気遣いたれど、御小姓なりと詐りたるに欺かれて、別に怪しみもせざりは誠に僥倖なりき〉（『昔夢会筆記』）

七日午前二時、なんと慶喜は配下の者を見捨て、数人の供を従え、小姓に化けて城を抜け出したのである。

というのも、慶喜は錦旗と戦いたくなかったのだ。

慶喜の皇室に対する強い想い入れは、生家水戸徳川家の独特な教育により育まれた。慶喜が二

十歳の時のこと、父の徳川斉昭は彼を手元へ招いて諭した。

〈おおやけに言い出だすべきことにはあらねども、御身ももはや二十歳なれば心得のために内々申し聞かするなり。我等は三家・三卿の一として、幕府を輔翼すべきは今さら言うにも及ばざることながら、もし一朝事起こりて、朝廷と幕府と弓矢に及ばるるがごときことあらんか、我等はたとえ幕府には反くとも、朝廷に向かいて弓引くことあるべからず。これは義公（水戸光圀卿）以来の家訓なり。ゆめゆめ忘るることなかれ〉（『同上』）

たとえそれが幕政に逆らうことになろうとも、我ら水戸徳川家が朝廷に向かって刃向かうことがあってはならない――この言葉は、明治四十年に慶喜が述べた事柄ゆえに、天皇家への崇敬の念をことさらに言い立てている点を差し引いて考えなければならないが、同家が尊王思想の強い御家柄であったことは事実のようだ。

水戸光圀は「水戸黄門」の名前でテレビドラマなどでもおなじみの人物であるが、彼が後世に遺した仕事として最も大きなものは『大日本史』という歴史書の編纂である。

『大日本史』は神武天皇から後小松天皇までの時代を、中国の儒教的な歴史観に当てはめて記述し、明暦三（一六五七）年に編纂が開始され最終的にでき上がったのは明治三十九（一九〇六）年という、息の長いというか長すぎる事業だ。そのため途中で、でき上がった部分のみ出版され、これが大きな評判を呼ぶ。

『大日本史』は淡々と歴史を記述するのではなく、儒教的な名分論に基づき政権の正閏（正統か否か）や人物評価を下すのが特徴だ。「君は君、臣は臣」と、君臣関係を突き詰めてゆくと、日

本の国家秩序は天皇を頂点とし、徳川家はその臣下となる。

関ヶ原の戦いを思い返していただきたい。徳川家康は天皇家から天下をお預かりしたわけではなく、豊臣家から武力で奪い取ったのだ。それを儒教的な解釈で正当化しようというのが、水戸光圀の『大日本史』編纂の当初の意図するところであったはずが、長い年月のあいだにどんどんと理論が変化していった。

『大日本史』の編纂過程で発展した思想を水戸学という。

水戸学は前期と後期に分かれ、ことに後期の水戸学は全国の志士たちに多大な影響を与えた。薩摩藩の西郷隆盛らが私淑した藤田東湖も、長州藩の吉田松陰が教えを請うた会沢正志斎も、ともに水戸藩に仕え、斉昭のブレーンであった人々だ。吉田松陰の門下生には、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山縣有朋など長州藩出身の人材が名を連ねている。

斉昭が真顔で息子に、〈我等はたとえ幕府には反くとも、朝廷に向かいて弓引くことあるべからず〉と語る陰には、彼らの薫陶があった。

幕末に志士たちの間に広まった尊王論は、もとはといえば水戸藩の学者たちが紡ぎ出したものである。だが、それが巡り巡って錦旗が翻っただけで並みいる大名家が次々と恐れ入ってしまう事態となり、水戸藩出身の将軍・慶喜の首を絞めるとは、これほど見事な皮肉もないだろう。

そのうえ将軍自身が母方の血を誇り、理念的に天皇家を崇めた志士たち以上に、天皇家への生理的な尊敬を抱いているのだから、自らの首に絡んだ糸をほどくすべもない。

七日朝、将軍が姿を消したことに気がついた幕臣たちは唖然とした。

大将が部下を置いて敵前逃亡するなど聞いたこともない話だ。武士道以前の問題である。あきれ果てたのはイギリス人も同様だった。

〈大君（たいくん）が大坂から逃亡したやり方は感心できない。大君自身にも、その側近にも、勇気というものがほとんど感じられない〉（パークスよりハモンド外務次官への半公信、一八六八年二月十五日付）（『遠い崖』六）

〈これは日本人の目から見ても、ヨーロッパ人の目から見ても、またいかなる点から見ても、不面目な次第であった〉（『一外交官の見た明治維新』）

サトウは大坂城の状況を視察している。

〈城の前はたいへんな群衆で埋まり、門を守る番兵の姿は見えなかった。奉行の役宅の門を叩いてみたが、返事はなかった。あきらかに逃亡してしまったのである。群衆は声をあげて笑った〉（『遠い崖』六）

江戸幕府は将軍という核、まさに中心の中心から崩壊した。社会の底辺から噴き出したマグマは、国家の新たな形を求めて大地の上をのたうっていた。

慶喜の「敵前逃亡」から四ヶ月を経た五月末、都城隊に奥羽遠征の援軍として出軍命令が下った。

本営から遠征支度として毛布一枚と、目印の腕章として「幅二寸、長さ五寸」の錦切（きんぎれ）が配布さ

れた。錦切は錦旗にちなんだ品ということなので、一同は太陽の破片でも受け取るかのように、両手でありがたく拝受した。

この時、肥田景之は赤痢に苦しんでいた。

〈まだ若年ではあり病院に入ることは潔しとせぬので、入院して治療をしろと申されましたけれども、やはり従軍しておりました。しかし困るのは船中で便通の場合など、誠に困難でした。それで始終甲板の便所の側に寝転んでおったのであります〉（『史談会速記録』第二百八十輯）

これでは船内に赤痢が蔓延してしまう。よくもこれほどはた迷惑な話が許されたものだが、たとえ十七、八の若造でも武士が意地を示せば、まかり通ってしまうのが薩摩藩である。

穏やかな波に揺られる旅の無聊を慰めるため、楽士たちが楽器に手を伸ばす。

新政府軍の間では、「トコトンヤレ節」という歌が流行していた。この歌は錦旗の製作に携わった品川弥二郎の作と伝えられている。

〈宮さま宮さま御馬の前のびらびらするのはなんじゃいな、トコトンヤレトンヤレナ
ありゃ朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃ知らないか、トコトンヤレトンヤレナ
伏見・鳥羽・淀・橋本・葛葉の戦いは、トコトンヤレトンヤレナ
薩長土しのおほ（合う）たる手際じゃないかいな、トコトンヤレトンヤレナ
音に聞こえし関東士どっちゃへ逃げたと問うたれば、トコトンヤレトンヤレナ
城も気概も捨てて東へ逃げたげな、トコトンヤレトンヤレナ〉（『戊辰戦争』）

蒸気船・三邦丸は日本一強い部隊を乗せ、大海原を滑るように前進する。手拍子、がなり声、ラッパ、太鼓などさまざまな形の音符が潮風に舞い上がった。

島津家の戦争　米窪明美著

発行・集英社インターナショナル　発売・集英社
定価 1,700 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7208-4

ウェブでのご予約は こちらにどうぞ！